公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（52）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

小牧（こまき）遺跡 4

（鹿屋市串良町）

縄文時代前期～弥生時代初頭編

第２分冊

（全３分冊）

2023 年 3 月

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー

総　目　次

【第１分冊】
巻頭図版（カラー）
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
目次
第Ⅰ章　発掘調査の成果……1
　第１節　発掘調査の経過……1
　第２節　整理・報告書作成の経過……6
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……11
　第１節　地理的環境……11
　第２節　歴史的環境……11
　第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡……15
第Ⅲ章　調査の方法と層序……21
　第１節　調査の方法……21
　第２節　層序……21
　第３節　層序についての補足……29
第Ⅳ章　遺構および遺物の分類……31
　第１節　遺構の分類……31
　第２節　土器の分類……32
　第３節　石材および石器の分類……36
第Ⅴ章　縄文時代前期～中期の調査……41
　第１節　遺構……41
　第２節　遺物（土器）……51
第Ⅵ章　縄文時代後期前半の調査……71
　第１節　遺構……71
【第２分冊】
第Ⅵ章　縄文時代後期前半の調査……1
　第２節　遺物（土器）……1
第Ⅶ章　縄文時代後期末から弥生時代初頭の調査…109
　第１節　遺構……109
　第２節　遺物（土器）……120
第Ⅷ章　縄文時代前期から弥生時代初頭の石器……155
【第３分冊】
第Ⅸ章　自然科学分析……1
　第１節　概要……1
　第２節　分析結果の報告……1
第Ⅹ章　総括……71
　第１節　縄文時代前期～中期……71
　第２節　縄文時代後期前半……73
　第３節　縄文時代後期末～弥生時代初頭……88
　第４節　発掘調査からみえる小牧遺跡……89
補遺……94
写真図版……95
奥付

第２分冊目次

第Ⅵ章　縄文時代後期前半の調査……1
　第２節　遺物（土器）……1
第Ⅶ章　縄文時代後期末から弥生時代初頭の調査…109
　第１節　遺構……109
　第２節　遺物（土器）……120
第Ⅷ章　縄文時代前期から弥生時代初頭の石器……155

挿　図　目　次

第２-１図　縄文時代後期前半遺構配置図および土器出土状況……2
第２-２図　縄文時代後期前半分類別土器分布図（１）…3
第２-３図　縄文時代後期前半分類別土器分布図（２）…4
第２-４図　縄文時代後期前半分類別土器分布図（３）…5
第２-５図　Ⅳ類土器……6
第２-６図　Ⅴa類土器……7
第２-７図　Ⅴb類土器……8
第２-８図　Ⅴc類土器……9
第２-９図　Ⅵa類土器（１）……10
第２-10図　Ⅵa類土器（２）……11
第２-11図　Ⅵa類土器（３）……12

第２-12図　Ⅵb類土器（１）……13
第２-13図　Ⅵb類土器（２）……14
第２-14図　Ⅵb類土器（３）……15
第２-15図　Ⅵb類土器（波頂部）……16
第２-16図　Ⅵc類土器……17
第２-17図　Ⅵ類土器（胴部）……18
第２-18図　Ⅶa類土器（１）……19
第２-19図　Ⅶa類土器（２）……20
第２-20図　Ⅶa類土器（３）……21
第２-21図　Ⅶa類土器（４）……22
第２-22図　Ⅶa類土器（５）……23
第２-23図　Ⅶb類土器（１）……24
第２-24図　Ⅶb類土器（２）……25
第２-25図　Ⅶb類土器（３）……26
第２-26図　Ⅶb類土器（４）……27
第２-27図　Ⅶb類土器（５）……28
第２-28図　Ⅶb類土器（６）……29
第２-29図　Ⅶa類土器（１）……30
第２-30図　Ⅶa類土器（２）……31
第２-31図　Ⅶa類土器（３）……32
第２-32図　Ⅶa類土器（４）……33
第２-33図　Ⅶa類土器（５）……34
第２-34図　Ⅶa類土器（６）……35
第２-35図　Ⅶa類土器（７）……36
第２-36図　Ⅶa類土器（８）……37
第２-37図　Ⅶa類土器（９）……38
第２-38図　Ⅶa類土器（10）……39
第２-39図　Ⅶa類土器（11）……40
第２-40図　Ⅶa類土器（胴部）……41
第２-41図　Ⅶb類土器（１）……42
第２-42図　Ⅶb類土器（２）……43
第２-43図　Ⅶb類土器（３）……44
第２-44図　Ⅶb類土器（４）……45
第２-45図　Ⅶb類土器（５）……46
第２-46図　Ⅶb類土器（６）……47
第２-47図　Ⅶb類土器（７）……48
第２-48図　Ⅶb類土器（８）……49
第２-49図　Ⅶb類土器（９）……50
第２-50図　Ⅶb類土器（10）……51
第２-51図　Ⅶb類土器（11）……52
第２-52図　Ⅶb類土器（12）……53
第２-53図　Ⅶb類土器（13）……54
第２-54図　Ⅶc類土器（１）……55
第２-55図　Ⅶc類土器（２）……56
第２-56図　Ⅶc類土器（３）……57
第２-57図　Ⅶb, c類土器（胴部）（１）……58
第２-58図　Ⅶb, c類土器（胴部）（２）……59
第２-59図　Ⅶ類土器（波頂部・装飾）……60
第２-60図　Ⅸa類土器（１）……61
第２-61図　Ⅸa類土器（２）……62
第２-62図　Ⅸa類土器（３）……63
第２-63図　Ⅸb類土器（１）……64
第２-64図　Ⅸb類土器（２）……65
第２-65図　Ⅸb類土器（３）……67
第２-66図　Ⅸb類土器（４）……68
第２-67図　Ⅸ類土器……69
第２-68図　Ⅹ類土器……69
第２-69図　Ⅺ類土器……70
第２-70図　縄文時代後期の無文土器（１）……71
第２-71図　縄文時代後期の無文土器（２）……72
第２-72図　縄文時代後期の無文土器（３）……73
第２-73図　特殊な底部・脚……75
第２-74図　特殊器種および写真……76
第２-75図　底部片分布図……77
第２-76図　後期前半の底部（１）……78
第２-77図　後期前半の底部（２）……79
第２-78図　後期前半の底部（３）……80
第２-79図　後期前半の底部（４）……81
第２-80図　後期前半の底部（５）……82
第２-81図　後期前半の底部（６）……83
第２-82図　後期前半の底部（７）……84
第２-83図　後期前半の底部（８）……85
第２-84図　円盤状土製加工品重量，直径計測値……86
第２-85図　円盤状土製加工品分布図……86
第２-86図　円盤状土製加工品（１）……87
第２-87図　円盤状土製加工品（２）……88
第２-88図　円盤状土製加工品（３）……89
第２-89図　円盤状土製加工品（４）……90
第２-90図　円盤状土製加工品（５）……91
第２-91図　円盤状土製加工品（６）……92
第２-92図　円盤状土製加工品（７）……93
第２-93図　円盤状土製加工品（８）……94
第２-94図　円盤状土製加工品（９）……95
第２-95図　円盤状土製加工品（10）……96
第２-96図　円盤状土製加工品（11）……97
第２-97図　縄文時代後期末～弥生時代初頭の遺構配置図および遺物分布図１……110
第２-98図　縄文時代後期末～弥生時代初頭の遺構配置図および遺物分布図２（部分拡大）111
第２-99図　土坑59・60号と土坑59号出土遺物……112

第２-100図　土坑61号…… 113
第２-101図　土坑61号出土遺物…… 114
第２-102図　土坑62号と出土遺物…… 115
第２-103図　集石74・75号…… 116
第２-104図　石斧埋納遺構１号と出土遺物（１）… 117
第２-105図　石斧埋納遺構１号出土遺物（２）…… 118
第２-106図　石斧埋納遺構１号出土遺物（３）…… 119
第２-107図　Ⅻ類土器…… 121
第２-108図　XIII類土器…… 122
第２-109図　XIII・XIII類土器（浅鉢形土器）…… 124
第２-110図　XIV類土器…… 125
第２-111図　XIV類土器（浅鉢形土器）…… 126
第２-112図　XV類土器（１）…… 128
第２-113図　XV類土器（２）…… 129
第２-114図　XV類土器（３）…… 130
第２-115図　中華鍋形土器（１）…… 131
第２-116図　中華鍋形土器（２）…… 132
第２-117図　中華鍋形土器（組織痕土器）（１）…… 133
第２-118図　中華鍋形土器（組織痕土器）（２）…… 135
第２-119図　中華鍋形土器（組織痕土器）（３）…… 136
第２-120図　中華鍋形土器（組織痕土器）（４）…… 137
第２-121図　中華鍋形土器（組織痕土器）（５）…… 138
第２-122図　中華鍋形土器（組織痕土器）（６）…… 139
第２-123図　XV類土器（浅鉢形土器）（１）…… 141
第２-124図　XV類土器（浅鉢形土器）（２）…… 143
第２-125図　XV類土器（浅鉢形土器）（３）…… 144
第２-126図　XXI類土器（１）…… 146
第２-127図　XXI類土器（２）…… 148
第２-128図　XXI類土器（３）…… 149
第２-129図　XXI類土器（４）…… 151
第２-130図　縄文時代前期～弥生時代初頭の石器
分布図（１）…… 156
第２-131図　縄文時代前期～弥生時代初頭の石器
分布図（２）…… 157
第２-132図　縄文時代前期～弥生時代初頭の石器
分布図（３）…… 158
第２-133図　縄文時代前期～弥生時代初頭の石器
分布図（４）…… 159
第２-134図　石鏃（１）…… 161
第２-135図　石鏃（２）…… 162
第２-136図　石鏃（３）…… 163
第２-137図　石鏃（４）…… 164
第２-138図　石鏃（５）…… 165
第２-139図　石錐…… 166
第２-140図　石匙（１）…… 168
第２-141図　石匙（２）…… 169
第２-142図　石匙（３）…… 170
第２-143図　石匙（４）…… 171
第２-144図　スクレイパー（１）…… 172
第２-145図　スクレイパー（２）…… 173
第２-146図　スクレイパー（３）…… 174
第２-147図　二次加工剥片…… 175
第２-148図　使用痕剥片（１）…… 176
第２-149図　使用痕剥片（２）…… 177
第２-150図　石核・原石（１）…… 179
第２-151図　石核・原石（２）…… 180
第２-152図　磨製石斧（１）…… 183
第２-153図　磨製石斧（２）…… 184
第２-154図　磨製石斧（３）…… 185
第２-155図　磨製石斧（４）…… 186
第２-156図　磨製石斧（５）…… 187
第２-157図　磨製石斧（６）…… 188
第２-158図　磨製石斧（７）…… 189
第２-159図　磨製石斧（８）…… 190
第２-160図　磨製石斧（９）…… 191
第２-161図　磨製石斧（10）…… 192
第２-162図　磨製石斧（11）…… 193
第２-163図　磨製石斧（12）…… 194
第２-164図　磨製石斧（13）…… 195
第２-165図　磨製石斧（14）…… 196
第２-166図　磨製石斧（15）…… 197
第２-167図　磨製石斧（16）…… 198
第２-168図　磨製石斧（17）…… 199
第２-169図　磨製石斧（18）…… 200
第２-170図　磨製石斧（19）…… 201
第２-171図　磨製石斧（20）…… 202
第２-172図　磨製石斧（21）…… 203
第２-173図　磨製石斧（22）…… 204
第２-174図　打製石斧（１）…… 207
第２-175図　打製石斧（２）…… 208
第２-176図　打製石斧（３）…… 209
第２-177図　打製石斧（４）…… 210
第２-178図　打製石斧（５）…… 211
第２-179図　打製石斧（６）…… 212
第２-180図　打製石斧（７）…… 213
第２-181図　打製石斧（８）…… 214
第２-182図　打製石斧（９）…… 215
第２-183図　打製石斧（10）…… 216
第２-184図　打製石斧（11）…… 217
第２-185図　礫器（１）…… 218

第２-186図　磨器（２）…… 219
第２-187図　磨・敲石（１）…… 222
第２-188図　磨・敲石（２）…… 223
第２-189図　磨・敲石（３）…… 224
第２-190図　磨・敲石（４）…… 225
第２-191図　磨・敲石（５）…… 226
第２-192図　磨・敲石（６）…… 227
第２-193図　磨・敲石（７）…… 228
第２-194図　磨・敲石（８）…… 229
第２-195図　磨・敲石（９）…… 230
第２-196図　磨・敲石（10）…… 231
第２-197図　磨・敲石（11）…… 232
第２-198図　磨・敲石（12）…… 233
第２-199図　磨・敲石（13）…… 234
第２-200図　磨・敲石（14）…… 235
第２-201図　石皿（１）…… 236
第２-202図　石皿（２）…… 237
第２-203図　石皿（３）…… 238
第２-204図　石皿（４）…… 239
第２-205図　石皿（５）…… 240
第２-206図　石皿（６）…… 241
第２-207図　石皿（７）…… 242
第２-208図　砥石（１）…… 244
第２-209図　砥石（２）…… 245
第２-210図　擦切石器…… 246
第２-211図　石錘（１）…… 248
第２-212図　石錘（２）…… 249
第２-213図　石錘（３）…… 250
第２-214図　石製品（１）…… 251
第２-215図　石製品（２）…… 252
第２-216図　軽石加工品（１）…… 253
第２-217図　軽石加工品（２）…… 254

表　目　次

第２-１表　後期包含層土器観察表１ ……98
第２-２表　後期包含層土器観察表２ ……99
第２-３表　後期包含層土器観察表３ …… 100
第２-４表　後期包含層土器観察表４ …… 101
第２-５表　後期包含層土器観察表５ …… 102
第２-６表　後期包含層土器観察表６ …… 103
第２-７表　土器底部観察表１ …… 104
第２-８表　土器底部観察表２ …… 105
第２-９表　円盤状土製加工品観察表１ …… 105
第２-10表　円盤状土製加工品観察表２ …… 106
第２-11表　円盤状土製加工品観察表３ …… 107
第２-12表　円盤状土製加工品観察表４ …… 108
第２-13表　晩期遺構内出土土器観察表 …… 119
第２-14表　晩期遺構内出土石器観察表 …… 119
第２-15表　晩期遺構観察表 …… 119
第２-16表　晩期包含層出土土器観察表１ …… 152
第２-17表　晩期包含層出土土器観察表２ …… 153
第２-18表　晩期包含層出土土器観察表３ …… 154
第２-19表　包含層石器観察表１ …… 255
第２-20表　包含層石器観察表２ …… 256
第２-21表　包含層石器観察表３ …… 257
第２-22表　包含層石器観察表４ …… 258
第２-23表　包含層石器観察表５ …… 259
第２-24表　包含層石器観察表６ …… 260
第２-25表　包含層石器観察表７ …… 261
第２-26表　包含層石器観察表８ …… 262
第２-27表　包含層石器観察表９ …… 263
第２-28表　包含層石器観察表10 …… 264
第２-29表　包含層石器掲載一覧表 …… 264

第Ⅵ章　縄文時代後期前半の調査

第２節　遺物（土器）

小牧遺跡からは，Ⅳa層～Ⅳb層を中心として，縄文時代中期末頃～縄文時代後期中頃までの多量の土器がバリエーション豊かに出土した。ただし今回報告する縄文時代後期前半の土器のなかにはⅤ・Ⅵ層から出土したものも含まれる。第Ⅲ章第３節にも記載したが，特に９～16区において，アカホヤ火山灰層（Ⅴ層）以上の残存状況が後世の攪乱の影響を受けて不安定な箇所がある。複数年に渡って接合を試みたが，口縁部～胴部までを復元できた資料は少なかった。そこで本報告では，先行の研究・編年を基に，主に口縁部の形態と文様の特徴に着目し出土土器をⅣ～Ⅹ類に分類した。また，縄文時代後期前半に帰属すると判断できるが，Ⅳ～Ⅹ類への分類が難しかったものをⅪ類とした。

本遺跡から出土した土器の遺跡における各分類ごとの分布の状況を第２－２～４図に示している。後期前半の土器全般の出土状況は，西側の竪穴建物跡に沿うエリア，東側の竪穴建物跡に沿うエリア，14～16区の３か所に集中して分布する様子がみられる。このうち３～５区の南壁近くの凹みの西側縁にあたる微高地のあたりに，特に多くが集中した。各分類ごとに分布の特徴がみられるが，詳細な分析は第Ⅲ章第３節と第Ⅹ章第２節にて述べる。

器種はⅣ～Ⅵ類とⅪ類は深鉢のみが出土し，Ⅶ～Ⅸ類は深鉢に加え，鉢形や台付皿形の特殊な形態のものも少数出土した。類別の特徴を示した模式図を第１分冊第Ⅳ章に示しているので参照いただきたい。

Ⅳ類（第２－５図　538・539）

二叉状の工具による細い沈線文を施す。沈線文は部分的に鋸歯状に描かれる特徴がみられる。本遺跡では口縁部外面に段を有するもの，直口する口縁部片２点と，Ⅳ類の可能性がある胴部片１点出土した。

Ⅳ類土器は，大平式と考えられる。

538は緩い波状口縁を呈し，波頂部が小さく隆起する。器壁はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。口唇部は平坦に形成され連続刺突文を施す。539は口縁端部を欠く。胴部との境目に段を形成する。

Ⅳ類のなかでも古手のタイプは539のように，口縁部と胴部の境目に段を形成し文様帯は口縁部にのみ施され，新しいタイプは段を形成せず文様帯がやや下方に広がる。なかでも538のように縦位の文様を描くものはより新しい傾向がみられるとの研究がある（相美2017）。

Ⅴ類

口縁部に指頭幅の太幅の凹線によって，１帯あるいは２帯構成の文様帯を形成する。凹線の幅は太く，１cm以上のものが主流である。凹線と器面との境目を丁寧にナデで仕上げるものが多い。裏面に文様が浮き出るものが多く，口唇部に指や棒状工具による刺突を巡らせたものもみられる。口縁部～胴部の器壁の厚さが均一なものが多く，平坦口縁が主であるが，口唇部に突起を有するものもみられる。ナデ調整のものと，器面に条痕が残るものとが出土し，調整の違いにより前者をⅤa類，後者をⅤb類に細分した。ただし本遺跡から出土したⅤa類は，ナデ調整がやや雑で，先に施した貝殻条痕をわずかに残す傾向がみられる。

Ⅴ類は，阿高式の系統であると考えられ，なかでもⅤb類は器面に条痕を残す宮ノ前タイプ（新東1988）に該当すると考えられる。Ⅴ類の胎土には金色の雲母を含むものが多い。また，円形の刺突文を施した突帯に区画された阿高系の凹線文（三角形状のモチーフ）をもつものが１点のみ出土した。これはⅤ類との時期差が小さいと捉え，Ⅴc類に分類した。

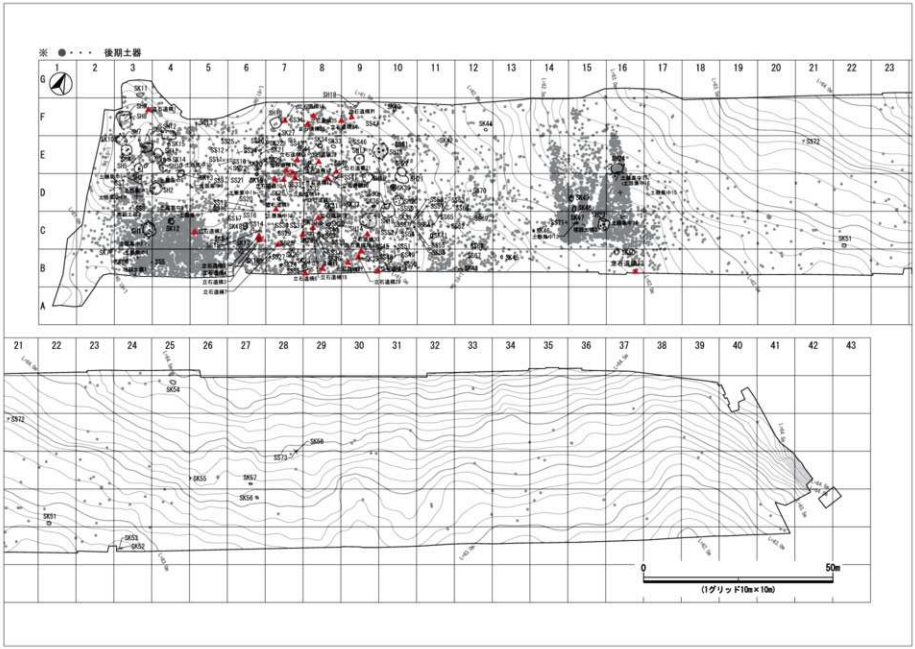
Ⅴa類（第２－６図　540・541）

口縁部が残存するものが少なく全体形は不明だが，文様帯の幅が広く，胴部下位に及ぶ傾向がみられる。掲載した２点ともに凹線幅が太く，線同士の間隔も広めである。凹線を施した後でよくナデで仕上げられ，凹線と器面との境目が滑らかである。同心円状あるいは三角形状のモチーフを描く。口縁部が残存する540は，平坦口縁で口唇部に小さな突起を有する。

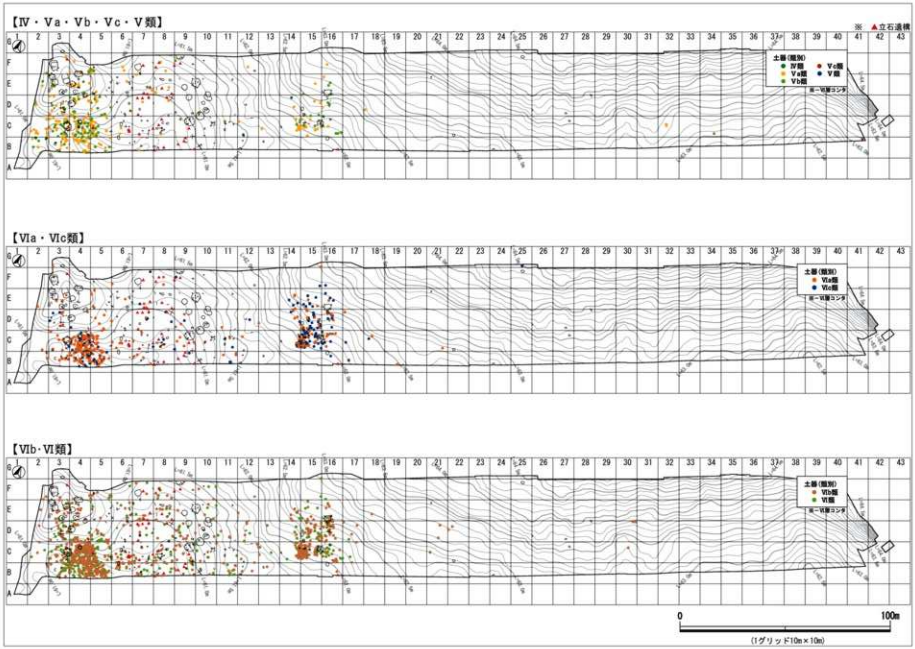
Ⅴb類（第２－７図　542～548）

出土点数は少ないが，平坦口縁で口縁部がやや外傾しながら直線的に立ち上がる傾向がみられる。凹線の幅がⅤa類より少し細くなり，凹線同士の間隔はやや密である。凹線と器面との境目はⅤa類と同様なもの（542・545）と，あまりナデられていないことからやや明瞭なものとがみられる。

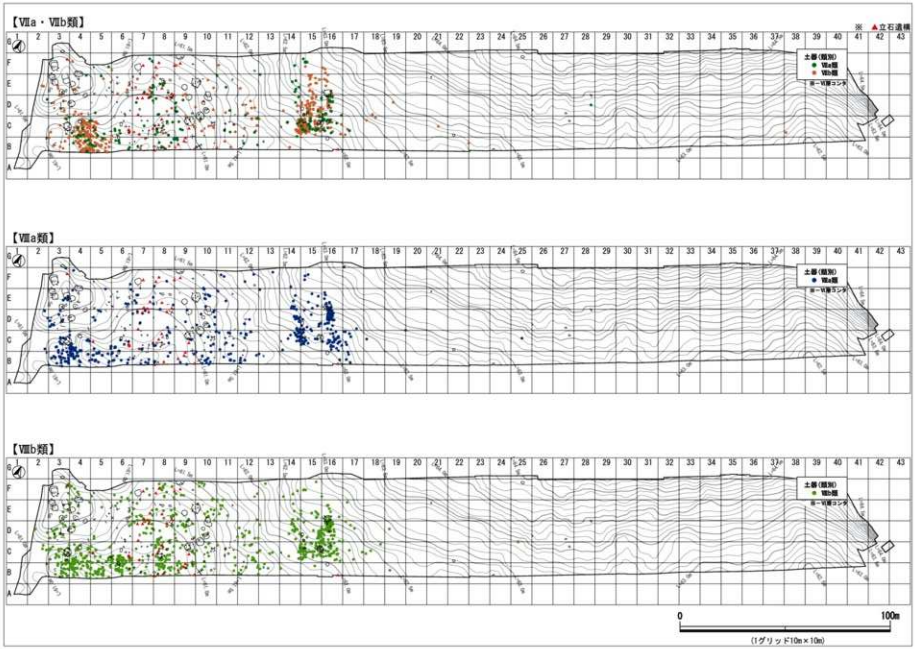
542・543は口縁部直下に２段の連点を巡らせ，その下に凹線文を描く２帯の文様帯構成である。544は口縁端部を指により連続して強く押圧することによって，波状に成形している。546は胴部最上位に縦位の高い突起を貼り付け，突起の外側を押圧する。口縁部直下に縦位の凹線を連続して施し，その下に凹点と曲線を描く。548は下胴部片で，縦位の凹線文が底部近くまで施される。



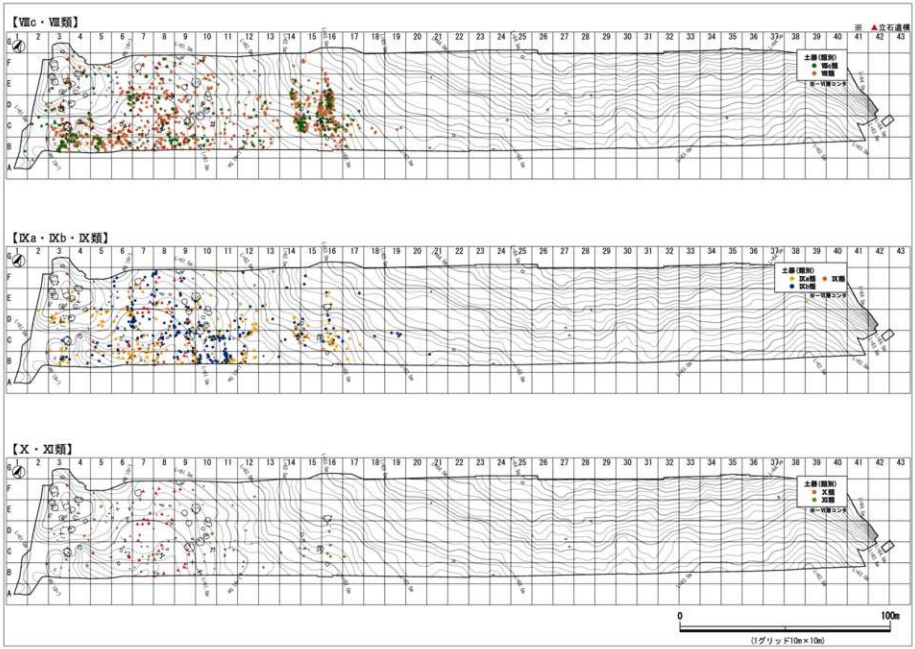
第２－１図　縄文時代後期前半遺構配置図および土器出土状況



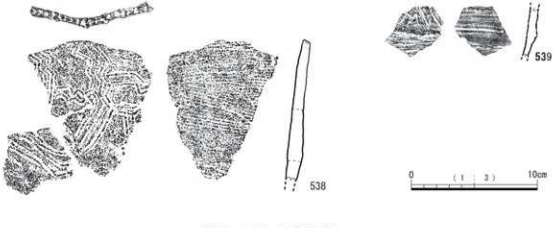
第２－２図　縄文時代後期前半分類別土器分布図（１）



第２－３図　縄文時代後期前半分類別土器分布図（２）



第２－４図　縄文時代後期前半分類別土器分布図（３）



第２－５図　Ⅳ類土器

Ⅴc類（第２-８図　549）

549は扁平で太幅の突帯に区画された凹線文を施す。凹線の幅はⅤa，Ⅴb類と比較してやや細く，時期の差がある可能性も考えられるが，三角形状や四角形状のモチーフを一筆描き風に描く特徴からⅤ類に分類した。文様は底部近くに及ぶと推測される。口唇部には円形刺突文を連続して施す。内外面ともにナデ調整である。混和材は粒子が細かく砂状に入る。搬入された可能性もある。外面に付着した煤を年代測定した結果（報告№４）^{14}C年代が3900±30yrBP１σ，２σ暦年代範囲が2466-2297 calBC（95.4%）である。

Ⅵ類

胴部上位に凹線により文様帯が形成される。文様帯は口縁部～頸部に集約され横位に展開する。凹線の幅はⅤ類土器よりもやや細くなる傾向がみられ，幅４～５mm程度のものが主流である。線がさらに細いものもみられ，Ⅶ類との分類が難しかったが，そのうち単沈線によるひと筆書き様のモチーフを横位に繰り返して展開させるものをⅥ類に分類した。円形・三角形・四角形状の渦巻文，鉤型文，多重の沈線文，大波文など文様のバリエーションも非常に豊かで，角に丸みのある幾何学文が描かれるものが多く出土した。Ⅴ類よりも凹線同士の間隔が狭まり，文様の密度がさらに高い印象となる。口唇部や口縁部直下に棒状工具や貝殻腹縁による刺突文を巡らせるものも多い。口縁部の形態は，直口するものと外反するものとがあり，平坦口縁と波状口縁のものとが出土する。器面の調整は，特に外面に条痕を残すものの比率が高い。

Ⅵ類は，従来，岩崎下層式・上層式と呼称されていた一群，そして，それらを包括して捉えられる宮之迫式系統（金丸2006・2011，真邊2010など）に該当すると考えられる。口縁部の形態・文様の特徴によりⅥa類，Ⅵb類，Ⅵc類に細分した。

Ⅵa類（第２-９～11図　550～571）

口縁部の文様帯が２帯構成である。口縁部上位に爪や工具による縦位の連続刺突文を巡らせ，その下に凹線による文様帯を形成する。口縁部はやや外傾しながら直線的に立ち上がるもの，ごく緩く外反するもの，わずかに内湾するものなど様々な形態がみられる。口縁部をあまり肥厚させないが，幅広あるいは断面三角形状の小さな突帯を貼り付け，突帯上に連続刺突を施すものも出土した。河口貞徳氏が提唱した岩崎下層式を含むと考えられる（河口1953）。

550～554は口縁部外面の最上位に小さな突帯を貼り付け，斜位に連続刻目を施す。その下には多重の凹線を水平に描く。552は文様のパターンは同様であると推測されるが，口縁部外面をわずかに肥厚させて口唇部よりやや下がる位置に連続刺突文を施す。550はわずかに右上がりの凹線文を描き文様の一部に曲線や入組状の部位が確認できる。553も同様に文様の一部に曲線が確認できる。551の口唇部と外面には赤色顔料が付着し，分析の結果，鉄が多く含まれ，ベンガラを塗布した可能性がある。556は波状口縁で，口縁部を肥厚させ，縦位の連続刺突文を施す。口唇部には円形の深い刺突文を連続して施す。沈線の一部を円形に変形させたモチーフを横位に展開させ，残存部の状況から４～５か所にモチーフを施している可能性が考えられる。モチーフ中央の崩れた円形の部分は波頂部の真下ではない。555とは文様の雰囲気が類似する。557は口縁部外面に幅広の薄い突帯を貼り付けた痕が残る。558～561は口縁部を肥厚させずに縦位の連続刺突文を巡らせる。559は爪による，560は棒状の工具による刺突と推測される。558～568は縦位の連続刺突の直下に一重・平行・多重の凹線を横位に巡らせ，その下に幾何学文や曲線文を描く。558は外傾しながら直線的に立ち上がり，丸い山形の突起を有することから波状口縁となると推測される。561も残存部は少ないが波状口

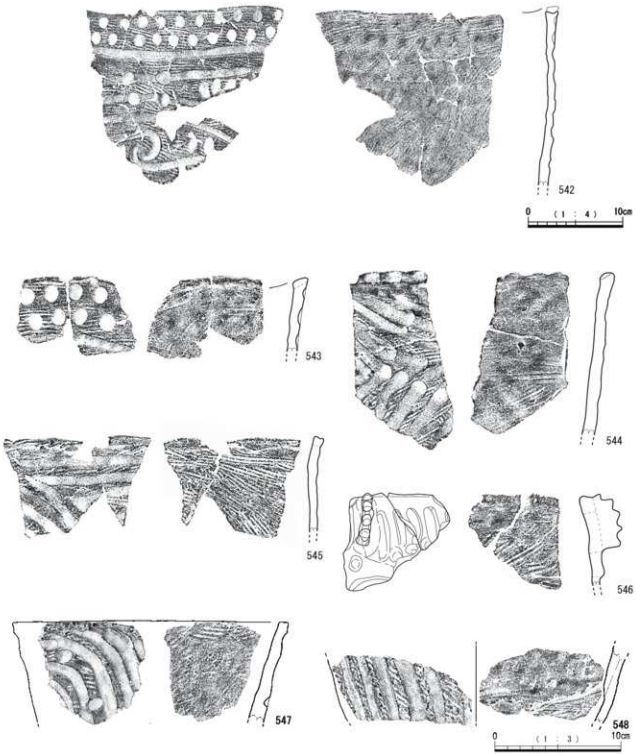
第２－６図　Va類土器

縁である。563は細幅の突帯を口縁部最上位に貼り付け，平坦口縁で，部分的に突起を有する。口唇部には平坦面を形成する。円形のモチーフを囲むように，大型の貝殻の腹縁による刺突文を放射状に施す。円形のモチーフはさらに下位にも展開させると推測される。口縁部よりわずかに下がる位置に粘土紐を粗く貼り付けて巡らせ，突帯上をハの字状に連続して刻む。566と568は同一個体と判断したもので，波状口縁を呈し波頂部に突起を有する。568の口唇部の沈線様の拓影は，粘土の貼り付けの痕跡である。胴部には四角の渦巻き状のモチーフを横位に連続させて施すと推測される。564，565，567は器形・文様・胎土の特徴が類似するため同一個体と判断した。平坦口縁に低い突起を有し，突起直下の口縁部は他の箇所にくらべて厚みをもたせて口唇部に平坦面を形成する。突起直下に同心円文を描く。569・570はここに分類したが，569は上→下，570は下→上の方向で線を描いたもので，施文の技法には違いが見られる。ともに口縁部直下に横位の凹線を施しその下に縦位の凹線を描き，線の終点と始点を強く押圧する特徴は本遺跡から出土したⅧ類にもみられることから，時期が若干下る可能性もある。570は口縁部がすぼまり胴部が張り出す丸みを帯びた形態であり，口唇部をやや肥厚させて平坦面を形成する。胴部上位の縦位の凹線文は２重に構成される。胎土は550・552・554・561・562・566・570には白色の粒子が目立つ。556・552・553・560・570には金色の雲母を含む。558・569は角閃石を多く含み粒子の細かな混和材が砂状に入る。571は口縁部外面を幅広く肥厚させ，W字状の凹線文を連続させる。南福寺式土器に該当すると考えられるが，ここでは形態，文様の特徴からⅥa類と併行する時期の遺物と考えられるため，ここに含めた。

Ⅵb類（第２-12～14図　572～599）

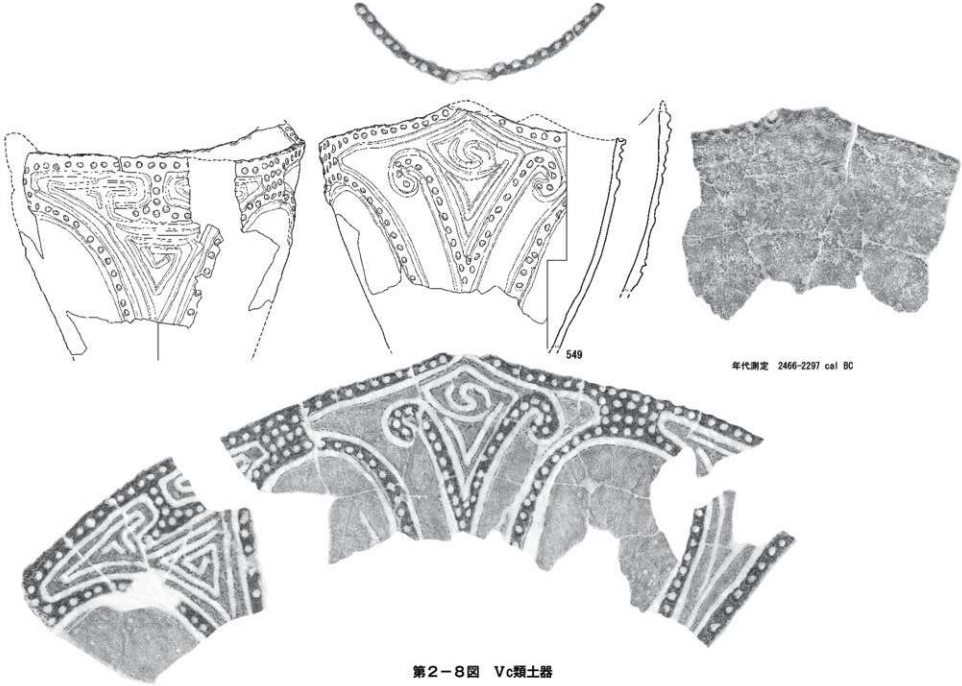
口縁部外面の文様帯が１帯構成のものが多く，胴部上位に集約される。口縁端部を平たく成形し刻目や円形刺突文を巡らせるもの，口縁部に突起や粘土紐による装飾を施すものが多く出土した。器形は口縁部が外反しながら開くタイプが増加する。Ⅵ類のなかでも文様のバリエーションが特に豊かな一群である。河口貞徳氏が提唱した岩崎上層式を含むと考えられる（河口1953）。

572～577は口縁部～胴部の器壁が均一で，口唇部を丸くおさめるかやや角張らせて形成し，凹線により曲線を描く。572・573には大波文を，575・577には曲線文を横位に連続して施す。573・576は口縁部直下に横位の凹線を巡らせる。576には補修孔が施される。578～587は口縁部を肥厚させず，口縁端部の外面や口唇部に連続刺突を施すものである。582～585のように，口縁端部に連続する刺突が大きく深いものは，口唇のラインが小さく波打つような見た目であり，Vb類との類似性もみられる。582・583の文様はやや細めの沈線により描かれ，部分的に入組状となる。588・589は平坦口縁を呈する。588は外面に施状工具による連続刺突を等間隔に施す。589は小片により全体的な施文の状況は不明だが，内外面の調整や，文様の凹線の特徴によりここに分類した。器壁が非常に薄い。590～599は波状口縁を呈し，凹線が細めである傾向がみられる。590は欠損のため形態不明だが，口唇部に透かしのような装飾を有すると推測される。外

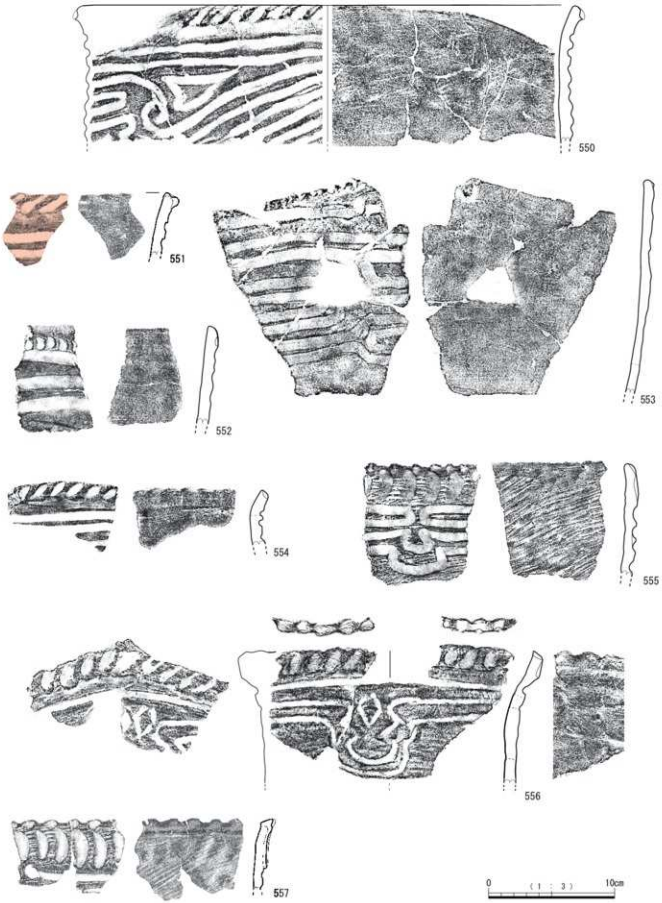


第2－7図　Vb類土器

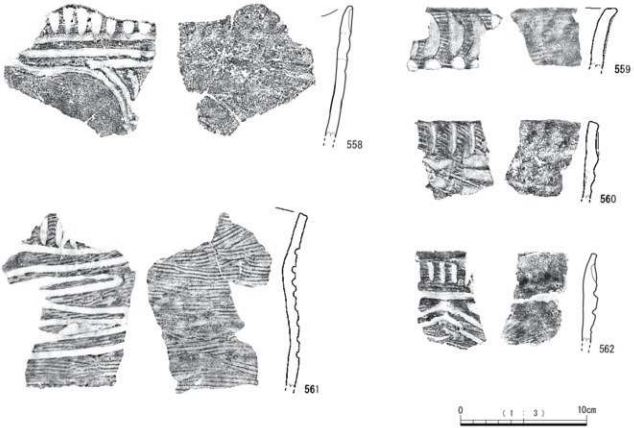
面に付着した煤を年代測定した結果（報告No.4）^{14}C年代が3760±20yrBP 1 σ，2 σ暦年代範囲が2208-2131calBC（74.02%）である。591・594は波頂部に粘土紐を貼り付ける。592は波頂部と，波頂部口唇部と波頂部同士の中間あたり2～3条のごく細い沈線による刻目を施す。Ⅷb類（指宿式系）に類似する特徴である。596，597も，Ⅷ類（指宿式系）に近い印象の平行沈線文や連点文を描くが，口縁・口唇の形態はⅥ類の特徴を有する。593・594は貝殻腹縁を用いて連続刺突を施す。胎土は572～575・579・581・582・586・587・596には金色の雲母を含む。580・591は角閃石を多く含み粒子の細かな混和材が砂状に入る。



第２－８図　Vc類土器



第２－９図　Ⅵa類土器（１）



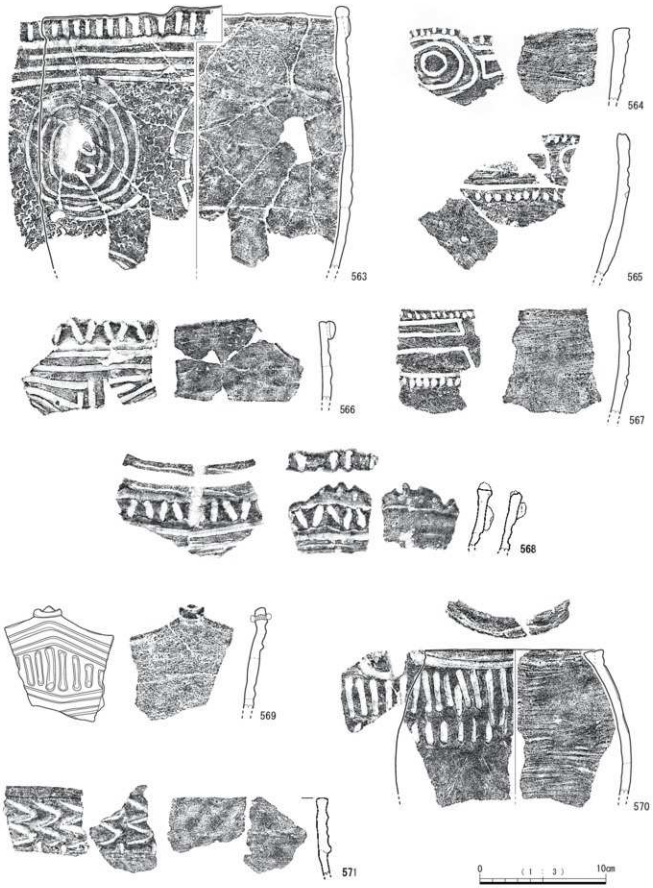
第２－10図　Ⅵa類土器（２）

Ⅵb類波頂部（第２-15図　600～607）

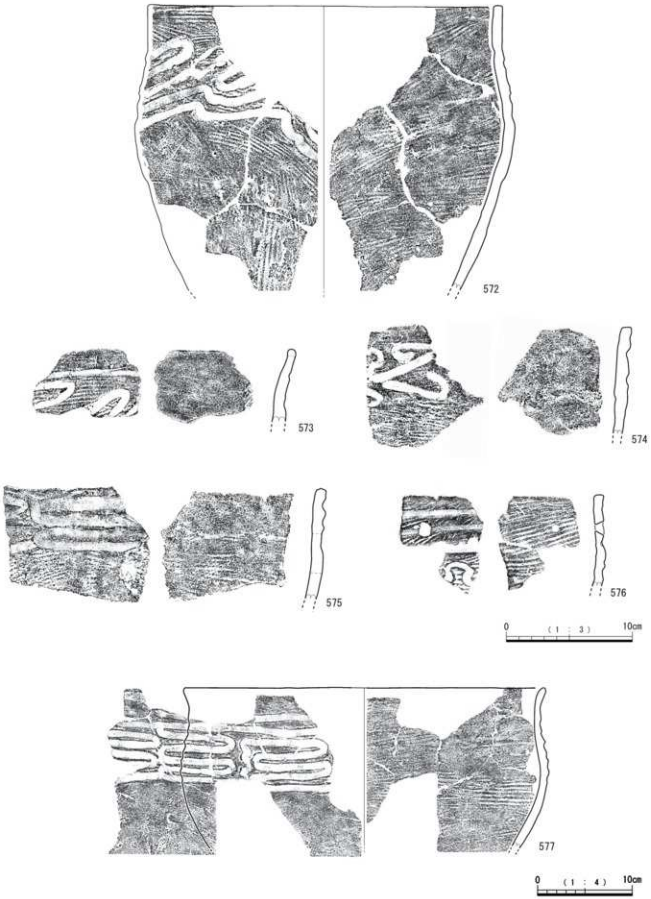
口唇部に粘土紐を貼り付けて装飾を施すもののうち，粘土紐上の刺突文や胴部の凹線の特徴がⅥ類に類似するもの。600～603は粘土紐を口唇に巻き付けるように貼り付ける。600・601は口縁部が内湾する。600は２本の粘土紐をねじり，口唇部に巻き付ける。外面には口縁部直下に太めの凹線による曲線文を描く。内面には工具によるケズリを施す。601は外面にも粘土紐を曲線的に貼り付け，大きな刻目を入れる。残存部下位に貝殻腹縁刺突が数か所確認できる603は，丸い粘土紐を口唇部に波状に貼り付ける。602・604は，細い竹管状の工具を用いて下から突き上げる様に刺突を施す。602は口唇部に粘土紐を貼り付け，大きな刻目を施す。604は口唇部の突起部分である。605・606の胴部外面の上位には凹線文が描かれる。605は波頂部に大きな突起をつくり，棒状工具で深い刺突を施し，小さな孔を形成する。Ⅶ類にも類似する形態のものが出土するが，孔の小ささや刺突文の状況からここに含めた。606は大きく開く器形で，浅い鉢状の形態である可能性がある。607は波頂部に縦位の突起を有する。３条の凹線が小さな山を描くように施される。文様帯は口縁部上位に集約され，外面には貝殻条痕が残る。600・602～604には角閃石を多く含み粒子の細かな混和材が砂状に入る。

Ⅵc類（第２-16図　608～618）

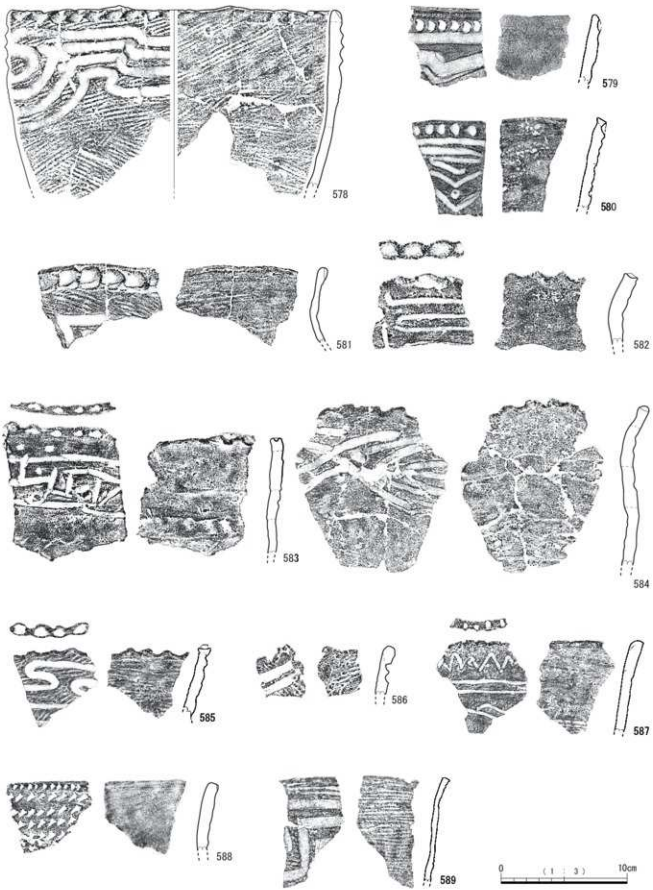
口縁部の文様帯が２帯構成である。本遺跡の場合は平坦口縁のものが主流である。口縁部直下に貝殻腹縁刺突文を巡らせる。胴部の文様は多条の平行沈線文の一部に曲線的な部分がみられるものが多く，Ⅵa類550～554とも雰囲気が近いが，やや右上がりに描かれる。宮之迫遺跡（曽於市）や山ノ中遺跡（鹿児島市）などで類例が多く報告される一群である。口縁端部を丸くおさめて器面に直接刺突するもの（608・611・614・615）と，口縁端部を角張らせてわずかに肥厚させるもの（609・612）とがみられる。612はごく緩い波状口縁を呈する。補修孔が施される。613は半円形のモチーフ上の口唇部に小さな隆起を形成する。隆起の頂点とモチーフの中央の位置はわずかにずれる。口縁部最上位に貝殻背面押圧文を巡らせた小さな突帯を有するものも少数出土（616～618）し，胴部の文様の類似からここに含めた。617と618は胎土や施文具が一致し，同一個体と考えられる。色調が他と比較して白っぽく明るい。胎土は610には金色の雲母を含む。609・613には角閃石を多く含み粒子の細かな混和材が砂状に入る。



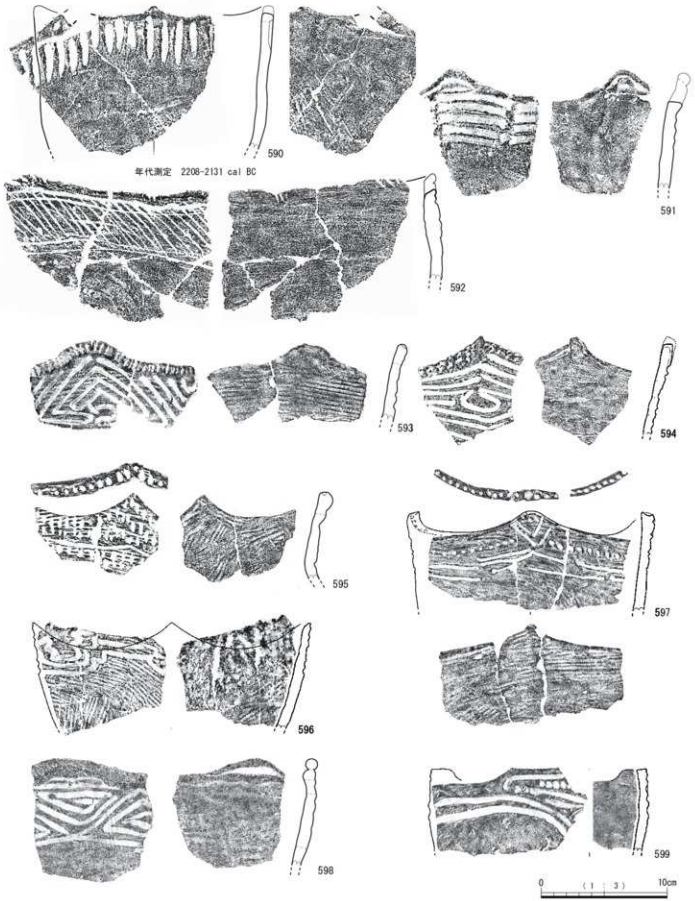
第２－11図　Ⅵa類土器（３）



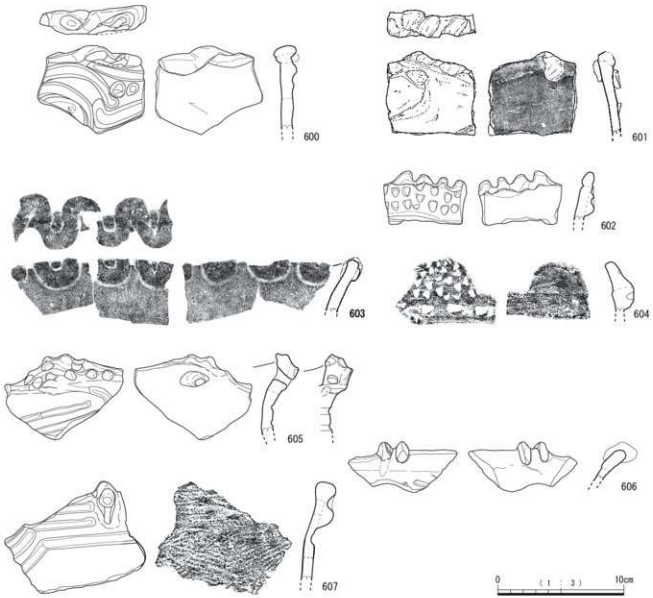
第２－12図　Ⅵb類土器（１）



第２－13図　Ⅵb類土器（２）



第２－14図　Ⅵb類土器（3）



第２－15図　Ⅵb類土器（波頂部）

Ⅵ類胴部（第２-17図　619～623）

619～623は胴部片である。619・620・622には平行線と曲線の組み合わせによる文様を，621には細い沈線により三角形状の渦巻文を描く。文様の一部が鉤手状となる。619は凹線間に貝殻腹縁刺突を施し，Ⅶb類（擬似縄文系）の範疇に入る可能性もある。623は，施文具は不明だが，サークル状の部分は押引文である。外面に赤色顔料が付着し，蛍光X線分析の結果，鉄を多く含有しベンガラの可能性がある。なお620の外面に付着した煤を年代測定した結果（報告№４）^{14}C年代が4120±30yrBP１σ，２σ暦年代範囲が2708-2578calBC（51.5%）である。

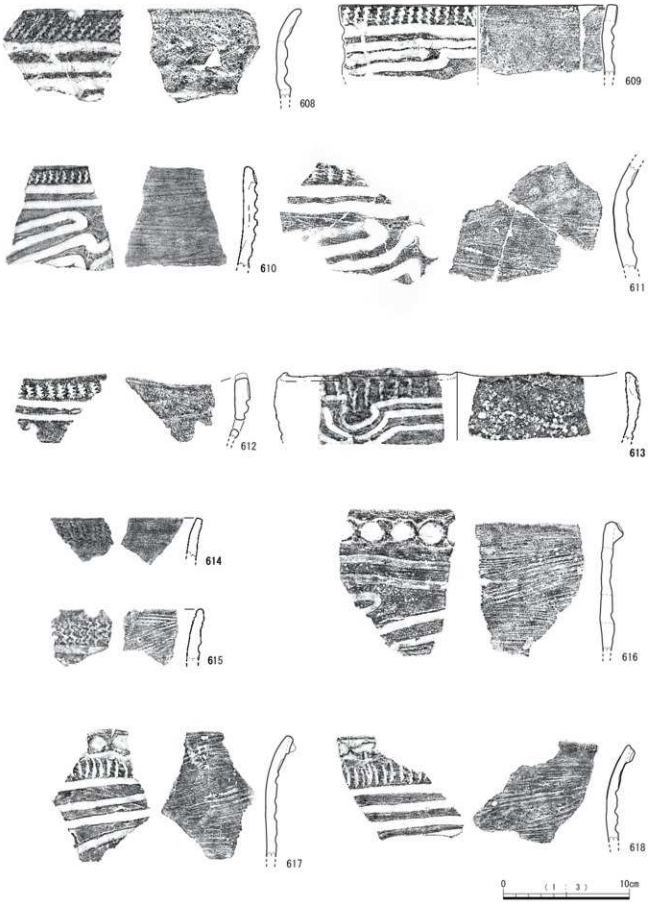
Ⅶ類

口縁部や頸部～胴部に縄文あるいは貝殻腹縁などによる密な刺突文を施す。巻貝の表面を回転させた可能性をもつものも少数出土した。頸部から胴部には２条単位の平行沈線文が描かれ，その間を縄文や貝殻腹縁刺突文などで充填させる。縄文が施されるものをⅦa類に，貝殻により施文したものをⅦb類に細分した。

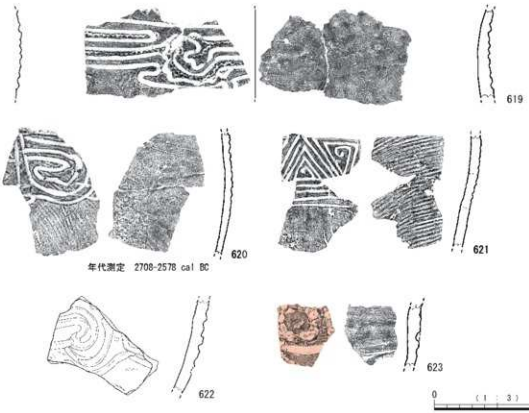
Ⅶa類（第２-18～22図　624～677）

文様原体として，縄文を使用したもの。

625～635は頸部で外反し開き，口唇部と外面頸部以下に縄文を施す。口縁部は短く，口縁端部の内面傾がごくわずかに内湾する傾向がみられる。口唇部に深い凹線を巡らせるものが主流であり，これらは頸部外面の屈曲部



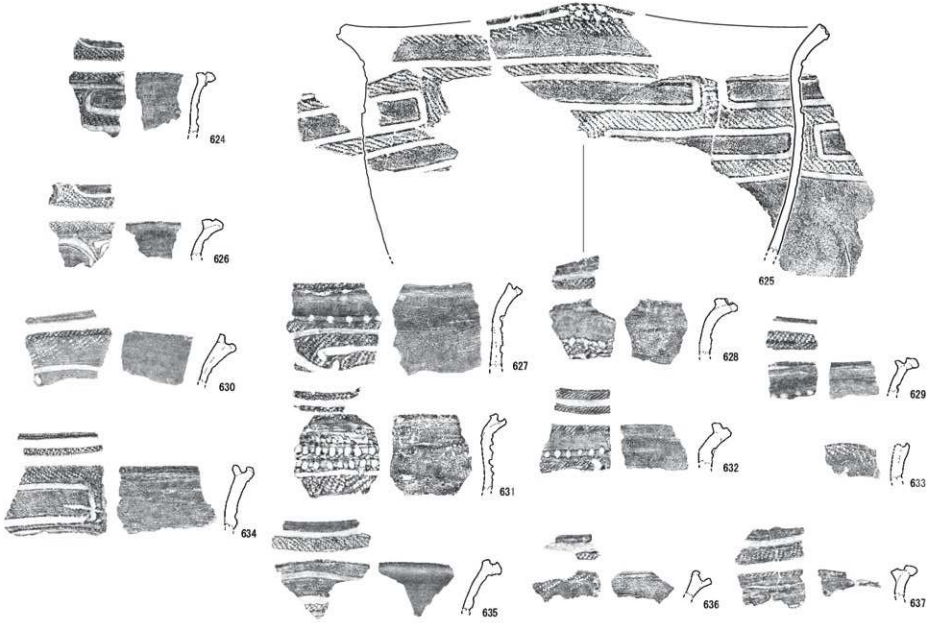
第２－16図　Ⅵc類土器



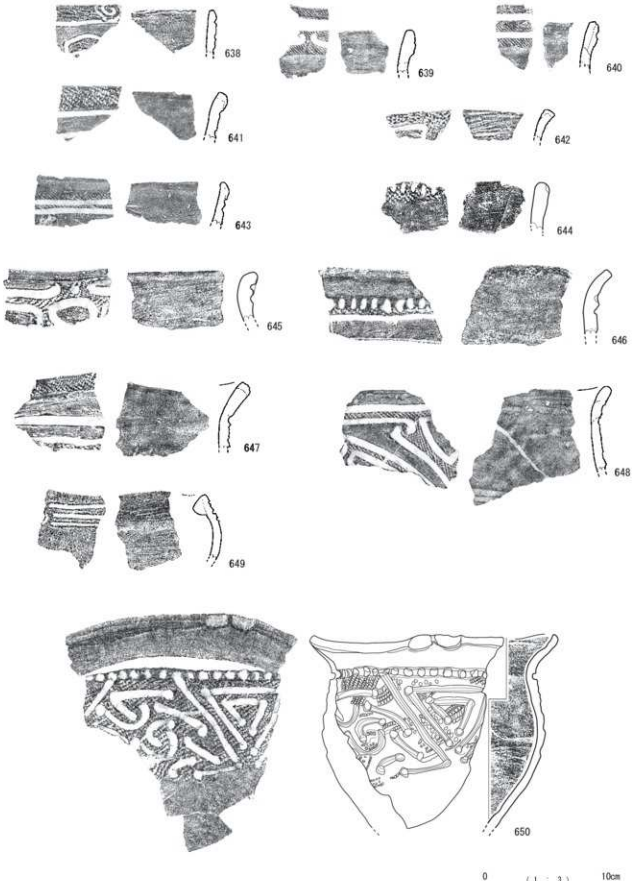
第２－17図　Ⅵ類土器（胴部）

付近に沈線を巡らせて，それ以下を文様帯とする特徴がみられる。口唇部の凹線は，棒状工具などで描かれたものと，粘土を貼り付けて形づくるものとがみられる。瀬戸内系の磨消縄文土器のなかでも主に福田Ｋ２式の影響を受けて製作された一群であると考えられる。625は残存率の高い資料である。緩い波状口縁を呈し，波頂部に棒状工具による刺突を施す。口縁部は外反しながら開き，胴部がわずかに張り出す器形である。胴部の縄文を窓枠状に磨り消す。624・626の口唇部には沈線ではなく曲線文が描かれ，これらは色調が黒っぽく薄手で硬質なため搬入品の可能性をもつ。629も同様の胎土であり，これらは特に内面の調整がミガキ様につややかで非常に丁寧である。627～629・631・632は頸部の沈線の中に連点文を施す。633は外面にコクゾウムシ圧痕が分析により同定されている。

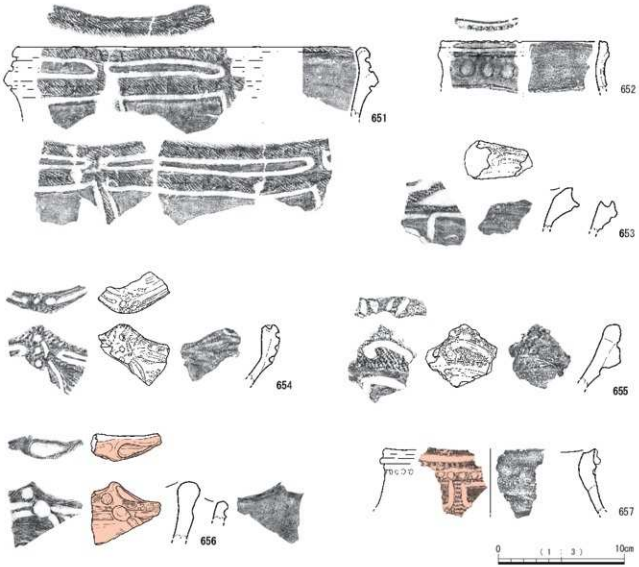
638～650は口縁部に凹線を施さず口縁部外面をさほど肥厚させないものである。638～642は直線的に立ち上がる口縁部片で，口縁端部付近に縄文を施すものである。642はわずかに外反しながら開く。639・640は胎土や施文の状況から同一個体であると考えられる。この４点は見た目上，縄文に非常に近く見えるが，方向性にわずかなばらつきが見て取れるため，施文具として貝を使用した可能性も考えられるが，ここに含めた。643は口縁端部がわずかに内湾する。口縁端部の縄文を磨り消す。644は丸みを帯びた口縁部の外面側に縄文と縦位の短い沈線を連続させる。645～648は口縁部が外反しながら開く。647は口縁端部に縄文を施す。口縁部上位を無文とし，頸部屈曲部付近に横位の沈線を巡らせて以下に文様帯を形成する特徴はⅦb類（指宿式）と同様である。646は沈線より上位に縄文と連続刺突文による文様帯を有する。650は，波頂部を２か所円形に押圧し，口縁部～頸部を無文とし，胴部～底部が急な角度ですぼまる特徴はⅦ類土器に類似するが，胴部の凹線文の特徴はⅥ類にも似る。649は口縁部がごく短く外反し，３条の沈線を横位に巡らせる。円形のモチーフの一部が残存する。丸みを帯びた浅鉢形である。器面に縄文は確認できないが，小池原上層式の影響をうけた磨消縄文系の土器であると判断しここに含めた。山ノ中遺跡（鹿児島市）で類例が報告される。口縁部内面を三角形状に肥厚させる。651～657は口縁部の外面側を肥厚させ，沈線や刺突等による文様帯を形成する。651は口縁部がやや内傾する。頸部がわずかに反るため深鉢であると推測される。平行沈線は数か所胴部側にも下垂する。下垂部分は残存部の状況から必ずしも均等に割り付けられているものではないと考えられる。縄文には638～642と同じような特徴がみられ，ヘナタリなどの巻貝を回転して施文した可能性もある。福田Ｋ２式のなかでも新しい段階の影響を受けて製作された可能性も考えられる。654～656は波頂部あたりの破片



第２－18図　Ⅶa類土器（１）



第２－19図　Ⅶa類土器（２）

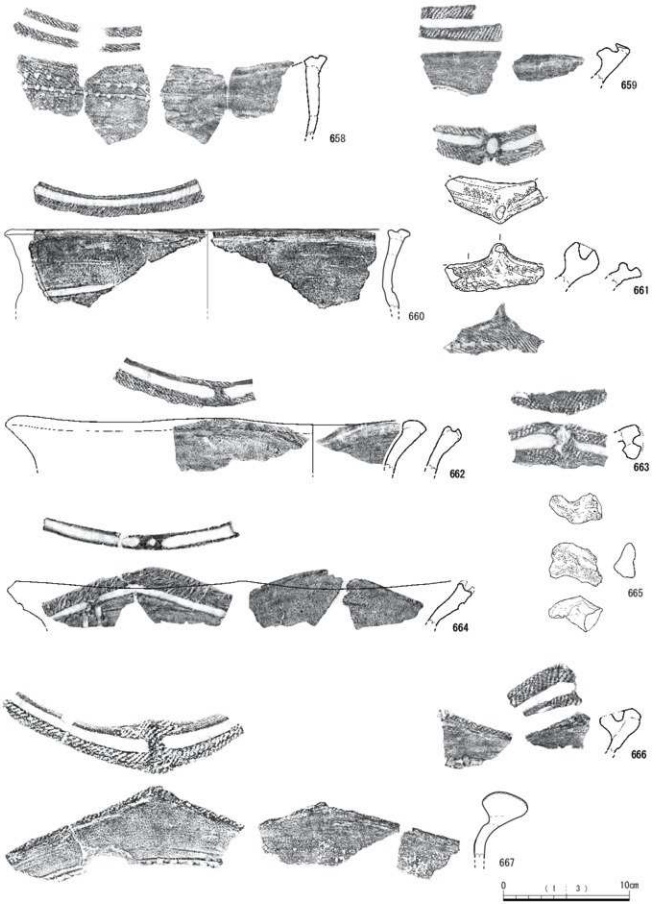


第２－20図　Ⅶa類土器（３）

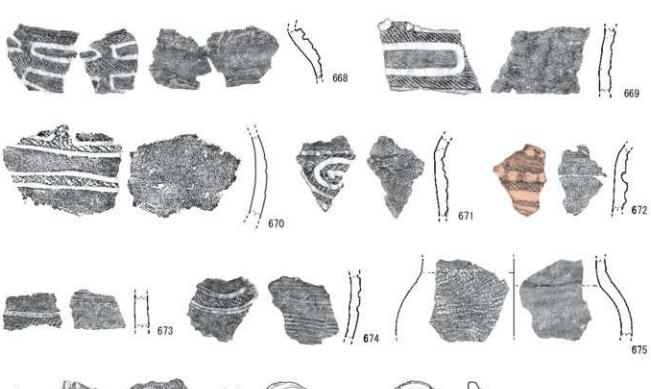
である。文様は凹線により描かれⅥ類土器の特徴に類似する。654・655は口縁部外面を肥厚させ，口唇部に凹線文や刻目を施す。656は山ノ中遺跡（鹿児島市）に報告される「ミミズク」をモチーフとしたとされる土器に文様が似る。内外面ともに丁寧なナデ仕上げである。657は口縁部がすぼまる器形で，口縁部肥厚帯の部分には貝殻腹縁刺突が施されており，頸部の縄文様の文様にも貝殻が使用された可能性がある。外面には赤色顔料が付着し，蛍光Ｘ線分析の結果，鉄を多く含有し，ベンガラの可能性がある。

658～667は口唇部を肥厚させて，幅広の文様帯を形成するものである。これらは瀬戸内地方の初期縁帯文系の影響を受けた一群であると考えられる。緩い波状口縁を呈するものが多い。658～664は上面に文様を施す。胴部に文様を施すものもみられ，664は撚りの甘い縄文を口縁部外面上位にも施す。658・660は巻貝による施文の可能性をもつ。659～667は口唇部文様帯の幅がより太い。659・666・667の頸部あたりには沈線や連点が巡る。口唇部の形態差はあるものの，頸部の文様にはⅦ類に共通した特徴がみられる。なお，657にも外面に赤色顔料が付着する。

668～675は胴部片である。668・670は胴部が大きく張り出し，口縁部がすぼまる浅鉢状の形態であると推測される。669～672は頸部片で，直線的に立ち上がる。672の外面には赤色顔料が付着し，蛍光Ｘ線分析の結果，鉄を多く含有し，ベンガラの可能性がある。675は口がすぼまる鉢状の器形で，形態としては668や670に類似する。粗い撚糸文が地模様として施されており，宮崎県を中心に分布する縄文時代早期の白ヶ野式の可能性もあるがここに含めた。内面は粗いミガキによって調整され，胎土は赤みが強い。677は口縁部分に施された装飾で，残存部分の状況から，口唇部に平坦面を形成し，凹線を巡ら



第２－21図　Ⅶa類土器（4）



第２－22図　Ⅶa類土器（５）

せるタイプであると推測される。径約2.0cmの孔を有し，突起の外面には沈線を施し，沈線の中に連点文を施す。676はやや上げ底の底部片である。縦位の沈線の間を目の細かな縄文により充填していて，底部接地面近くまで文様帯を形成する。

Ⅶa類の胎土の特徴としては，625・628・632・634・641・645・646・648・650・653・654・657・658・663～667・669・670・672・673には金色の雲母を含んでいる。また，赤色粒・白色粒の粒子に透明感をもつものが多く，石英や玉随の粒子を混和剤とした可能性も考えられる。観察表を参照していただきたい。

Ⅶb類（第２-23～28図　678～733）

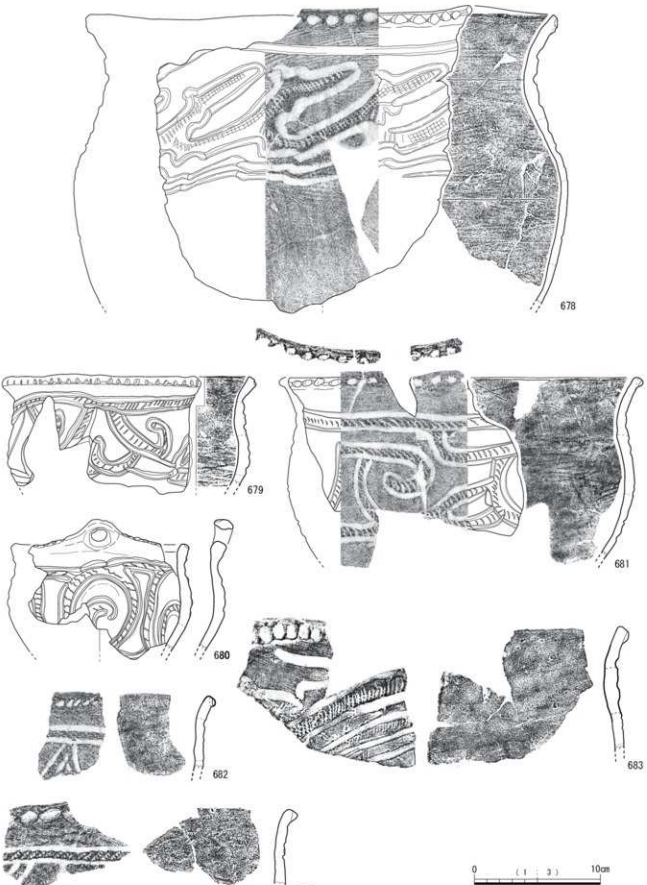
文様原体として，貝殻を使用したものである。口縁部上位に小さな突帯を形成し刺突を施すタイプと，口縁部上位の器面に直接刺突を施すタイプとがみられる。平行沈線文の間に貝殻腹縁刺突文を整然と施すものが主流である。一部に沈線で区画せず，低い突帯により文様を描き，その突帯上や際を刺突するものがみられる。残存率の高いものに限られ，その点数は少ないが，頸部で緩く外反しながら開き，胴部～底部に向かって急な角度ですぼまる。平行沈線間を貝殻腹縁刺突で充填する技法については，宮崎県に広く分布する綾式土器との関連も考えられる。綾式土器についてはⅥ類と同様に宮之迫式土器に包括する考え方もある（真邉2011など）。

678～694は口縁部最上位に断面三角形状の小さな突帯を巡らせて，その上に刻目を施すものである。

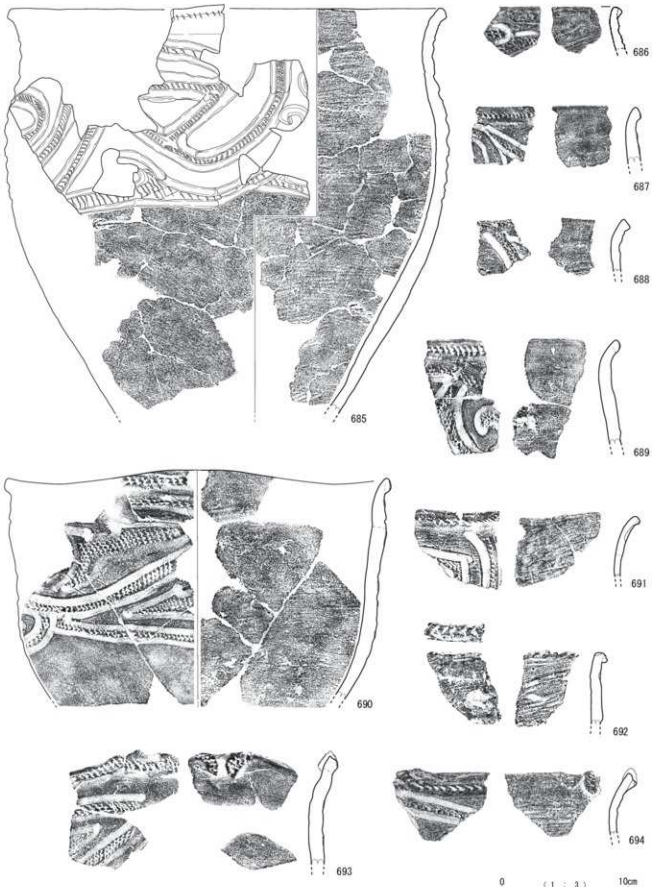
678～684は口縁部突帯上に貝殻背面（678・679・681～684）や棒状工具（680）を使用して刻目を巡らせる。679・680は頸部を横位の平行沈線により区画し，沈線間を貝殻腹縁刺突により充填させる。胴部には平行沈線による円形や鉤手状のモチーフを横位に幾何学的に展開させる。文様帯の幅が広めで，胴部下位に及ぶものもみられる。678は頸部を区画する凹線が単沈線で，胴部にはⅥ類土器の572に類似した大波文を描く。文様帯は胴部上位に収まる。683は頸部を沈線で区画しない。文様は678と同様に斜位に描かれると推測される。

685～694は口縁部突帯上に貝殻腹縁連続刺突を密に施す。頸部を平行沈線で区画せず，幾何学的文様を横位に描く。文様の一部が鉤手状となる。口縁部の直下から平行沈線文が描かれるものもみられる。693・694の口唇部には細い粘土紐を巻くように貼り付けて装飾を施す。

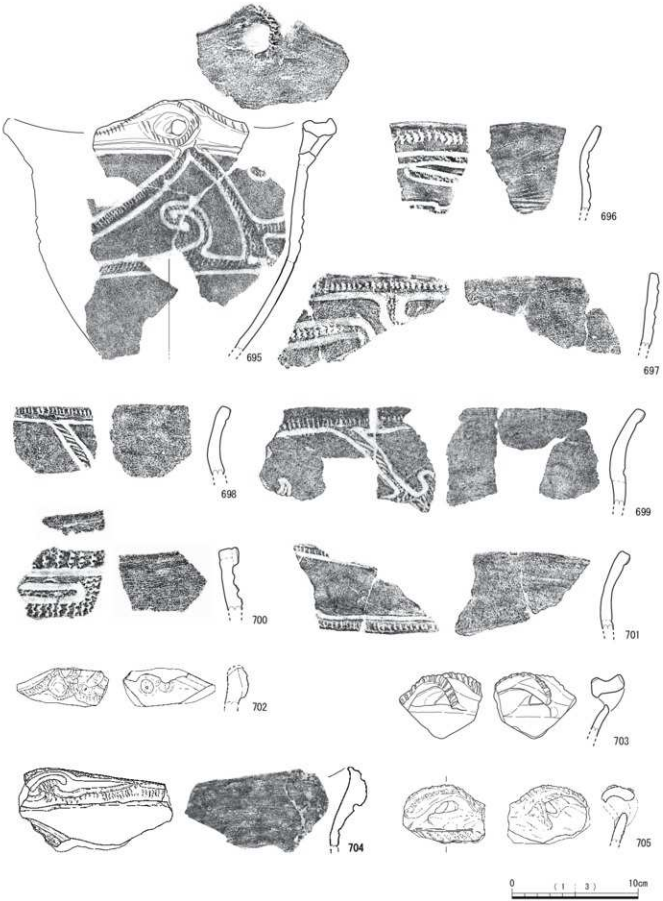
697～701は口縁部外面の器面に直接貝殻腹縁刺突を施す。695～697は口縁端部の外面側に面取りにより平坦面



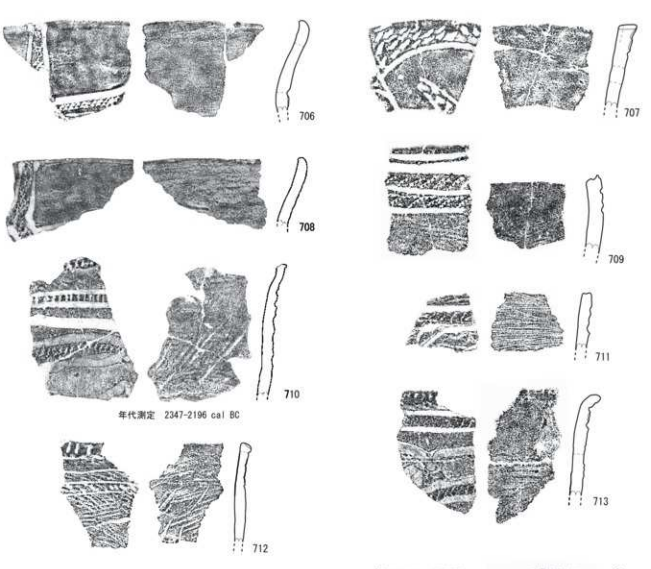
第２－23図　Ⅶb類土器（１）



第２－24図　Ⅶb類土器（２）



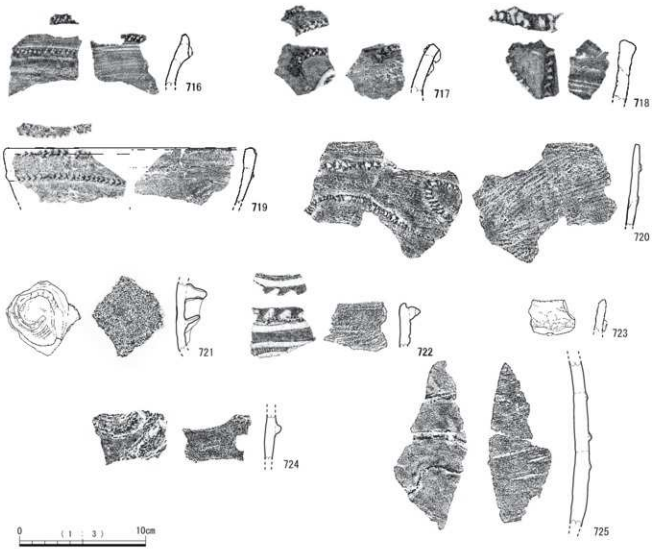
第２－25図　Ⅶb類土器（3）



第２－26図　Ⅶb類土器（４）

をつくり，698～701は口縁端部を「コ」の字状に形成する。696は平行沈線により，その他は単沈線により口縁部直下を横位の沈線・凹線（697）により区画する。胴部には斜位に平行沈線を下垂させる破片が多い。695は波状口縁で，波頂部～胴部下位までを復元できた。口縁部は緩く外反しながら開く。胴部はあまり張らず，底部に向かい急な角度ですすぼまる。波頂部を突起させ，径1.5㎝の孔を有する。胴部下位に文様帯が及び，鉤手状のモチーフを含む平行沈線文を横位に幾何学的に展開させると推測される。699には鉤手状のモチーフが横位に連続する。700は口縁部最上位に扁平な幅の広い突帯を貼り付け，口唇部に平坦面を形成する。突帯直下を横位の凹線により区画する。

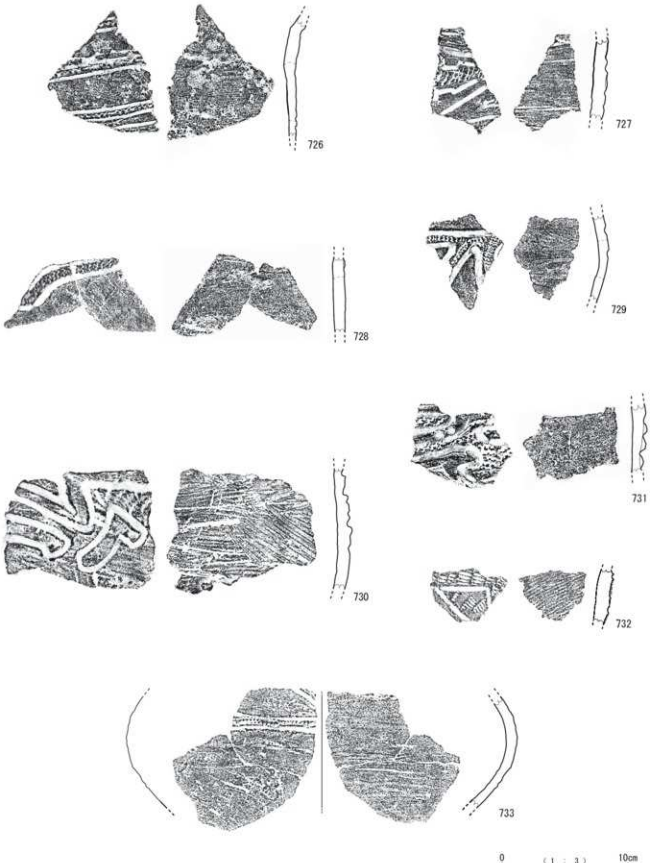
702～705は口唇部の装飾に貝殻腹縁刺突を施すものである。702は内外面から２か所穿孔を施すものの，そのうち左側は貫通しない。外面の孔の周りや波頂部の口縁端部に細幅の粘土紐を巻き付けるように貼り付け，貝殻腹縁により密な刺突を施す。口縁部最上位にも同様の小さな突帯を貼り付ける。704は口縁部外面を大きく肥厚させて，沈線と貝殻腹縁刺突による文様帯を形成する。



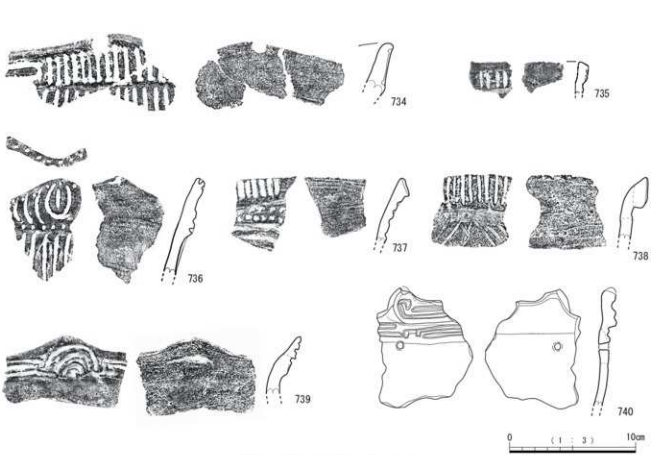
第２－27図　Ⅶb類土器（５）

沈線の始点と終点は入組状に施される。胴部に平行沈線文が曲線的に描かれると推測される。口縁端部は内湾する。703・705は695と同じ形態の波頂部突起である。705は突起に細幅の突帯を貼り付け，その上に貝殻腹縁刺突文を施す。外面の沈線は細い二叉状の工具により描かれる。胎土は明るく白っぽい色調で，搬入品の可能性がある。第２-23～28図に掲載した土器の胎土の特徴としては，金色の雲母を含むものの割合がⅦa類と比較して高く，含まないものは696・700・704である。観察表を参照していただきたい。

706～708は口縁部外面最上位に刺突文を巡らせず，縦位に文様帯を形成する。706・708は同一個体であると判断した。口縁部は外反しながら開き，口縁端部は内湾する。口縁端部の内面の際を始点か終点とする平行沈線文を数か所垂下させて描き，頸部外面に施す横位の文様帯につなげると推測される。707は外傾しながら直線的に立ち上がる口縁部片で，器壁は口縁端部側がわずかに厚く，口縁端部には平坦面を形成する。残存部右端にかかり図化が難しいが，口唇部に施した縦の沈線が１か所確認できる。曲線的なモチーフを口縁部直下から描くと推測され，施文具は篦状の工具であるが，沈線で区画し連続刺突を充填させる技法からここに含めた。709は口縁部外面の最上位に２本の貝殻腹縁刺突文と横位の沈線を２段施す。口唇部には凹線を巡らせる。710～715は胴部上位や頸部に棒状工具により細幅の平行沈線文を水平に巡らせ，その中に貝殻腹縁刺突を等間隔に施すものである。710と713は胎土や文様の特徴から同一個体であると判断した。口縁部はわずかに外反しながら開く。口縁端部に小さな突帯を粗く貼り付け貝殻腹縁により刻む。残存部下位にはごく浅い凹線により平行線を描きその間に貝殻腹縁を等間隔に刺突する。外面に付着した煤を年代測定した結果（報告№４）^{14}C年代が3820±30yrBP１σ，２σ暦年代範囲が2347-2196calBC（87.8%）である。712はつくりが粗く，内外面に貝殻条痕を施す。714・715は



第２－28図　Ⅶb類土器（6）



第２－29図　Ⅷa類土器（１）

口縁部が外反しながら開き，714と715は同一個体であると判断した。胴部が口縁部よりも外側へ張り出す丸みを帯びた器形で，残存部の状況から，口唇部に突起をもつ可能性もある。

716～725は細い突帯を貼り付けて，貝殻腹縁刺突文を施す一群である。各類への分類が難しかったものを集めたことを否めないが，施文具に貝殻を使用することに着眼しここに含めた。717は残存部下位に凹線による曲線文が描かれると推測される。718は口縁部片で小さな山形の突起をもつ。722は突帯が高く，口唇部に平坦面をつくり凹線を施す特徴は，Ⅷa類とも共通する。721は部位は不明だが，器面に貼り付けた渦巻き状の高い突帯である。突帯の上や側面に貝殻腹縁をまばらに刺突する。723は細い突帯を粗く貼り付ける。724と725は胴部片で，天地・傾きは不明である。ともに突帯の際に貝殻腹縁刺突を施す。

726～733はⅧb類に該当する胴部片である。730の胎土には大粒のシャモットが混じる。731は沈線を深く施すため，器面の凹凸が著しい。732は沈線間を貝殻腹縁を押引き充填する。縄文時代早期に該当する可能性も考えられるが，内面の条痕が早期に出土するものと比べて整然と施されることからここに含めた。733のように大きく張り出す器形のものも出土している。

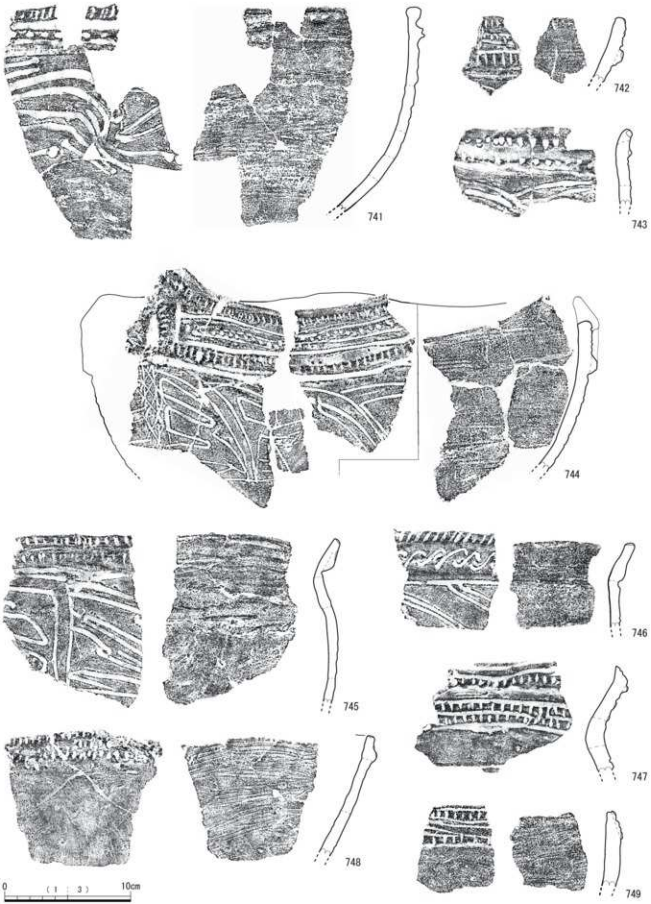
Ⅷ類

頭部以下に，平行沈線や単沈線により文様を描くもの。線の始点・終点をやや深く刺突し，入組状に施す傾向がみられることは，Ⅶ類の一部にも共通する特徴である。文様を描く線の太さについては本遺跡の場合，Ⅵ類と同様の凹線によるものも多く出土するが，文様的な特徴が上記に該当するものをⅧ類と判断し，報告する。器形は，胴部が張り出し丸みを帯びるプロポーションのものがⅥ類と比較して多い。平坦口縁と波状口縁のものとがあり，口唇部の一部や口縁部上位に把手などの装飾を施すものも多い。口縁部の形態は直口，内湾，外反とバリエーションが非常に豊かで，頭部で絞まり外反するものの比率が高い。口縁部の厚みが均一なものと，肥厚させるものとがある。また胴部とは別の口縁部文様帯を形成するものも多く出土した。胴部文様はⅧ類の特徴をもち，かつ口唇部に１条の凹線を巡らせるものも一定数確認される。

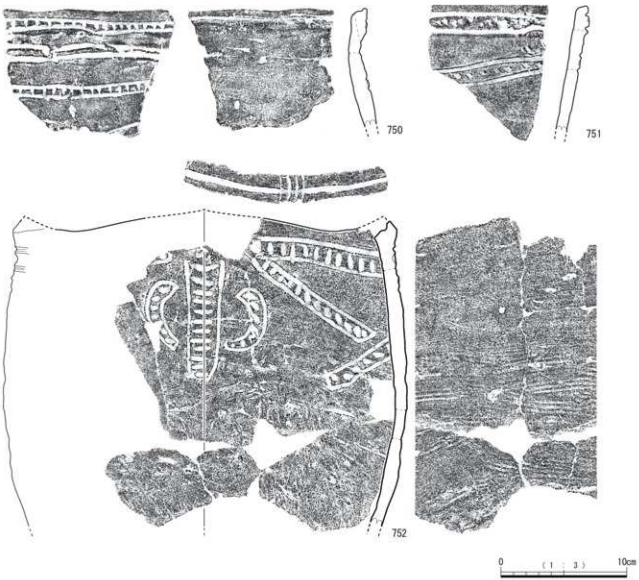
Ⅷ類は概ね指宿式に該当すると考えられる。口縁部の形態と口縁部文様帯の特徴からⅧa類，Ⅷb類，Ⅷc類に細分した。ただし，Ⅷc類のなかには，Ⅵ類の文様的特徴をもつものも少量ながら出土する。

Ⅷa類（第２-29～40図　734～807）

口縁部上位に，胴部とは別の文様帯を有するもの。口縁部を肥厚させたものが多い。多くは口唇部にも文様を



第２－30図　Ⅷa類土器（2）



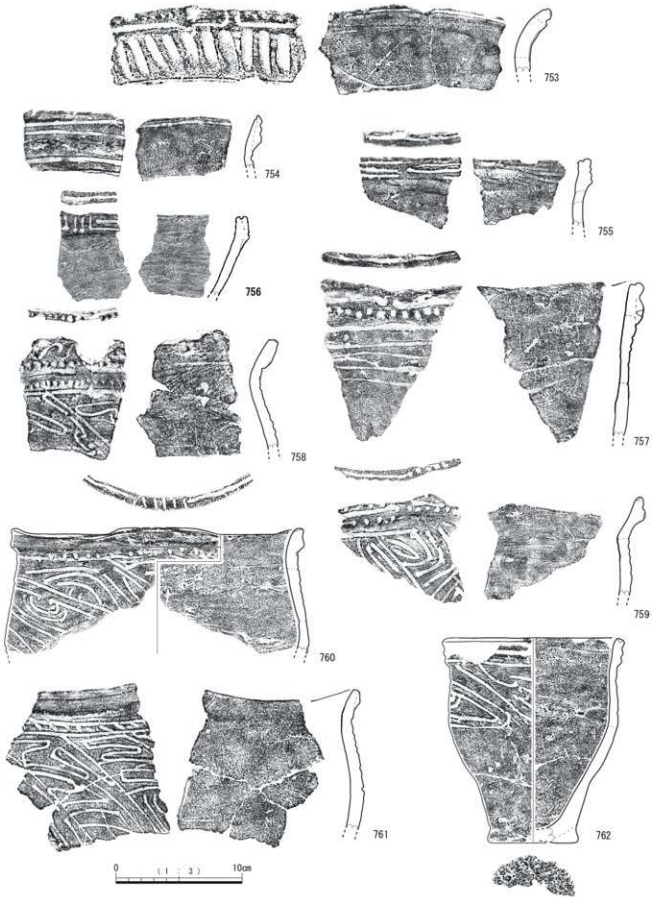
第２－31図　Ⅷa類土器（３）

施す。文様を描く沈線が細い傾向が顕著である。口縁部外面の文様は，横位の平行沈線，巻貝などによる連続刺突を巡らせるものが主である。胴部には斜位の平行沈線を基調にした大胆な幾何学文を描くものが多い。胴部文様帯の幅は広く，胴部下位に及ぶものもみられる。縁帯文系の土器の影響を受けていると考えられ，中原遺跡（志布志市）で報告されたⅣ-a，b類に該当する一群であると考えられる。

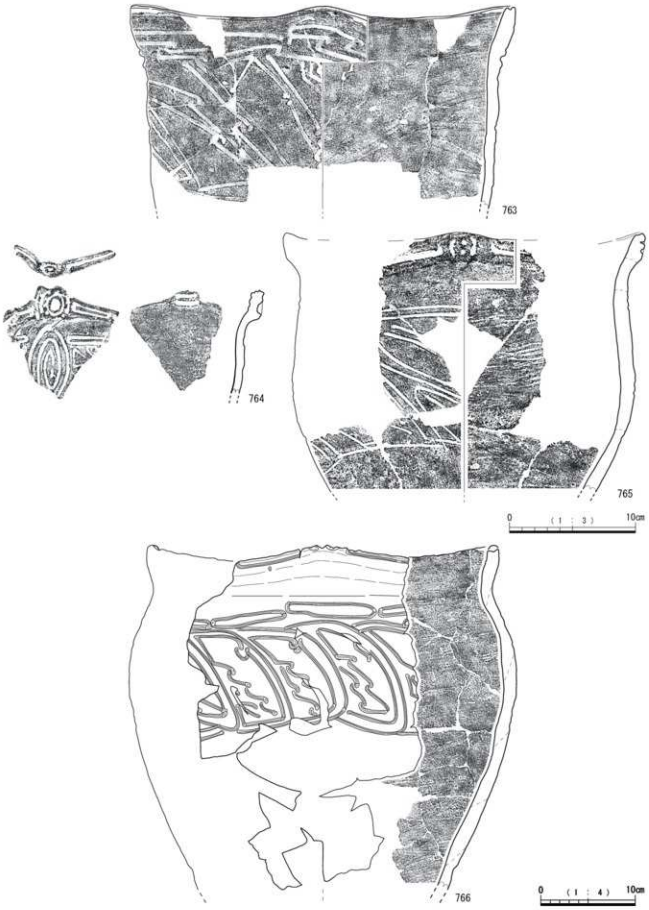
734～738は口縁部外面に縦位の沈線を連続して施し，突帯直下に文様を施す。736は平たく形成した口唇部に連点文を施し，Ⅵ類の範疇に入る可能性もあるが，波頂部直下に円形のモチーフを描き，口縁部文様帯の上下に連点文を横位に巡らせる特徴からここに含めた。739と740は波頂部直下に曲線的なモチーフを描き，数条の平行沈線を施す。740は文様帯が胴部上位に集約されており，補修孔が内外面から施される。

741～748は口縁部文様帯の上部や下部に粘土紐を貼り付けて見た目上の肥厚帯を形成し，その上に貝殻腹縁や篦先による連続刺突を施すものである。このタイプは口縁部が内湾気味の器形のものが多い。741・744はともに浅めの丸みを帯びた鉢となると推測され，胴部下位に文様帯が及ぶ。741はやや太めの平行沈線により横位に，744は細い平行沈線により斜位に文様が描かれる。743・748は口縁部の文様の特徴が類似する。743の胴部上位には平行沈線による曲線文が描かれ，748の胴部は無文である。

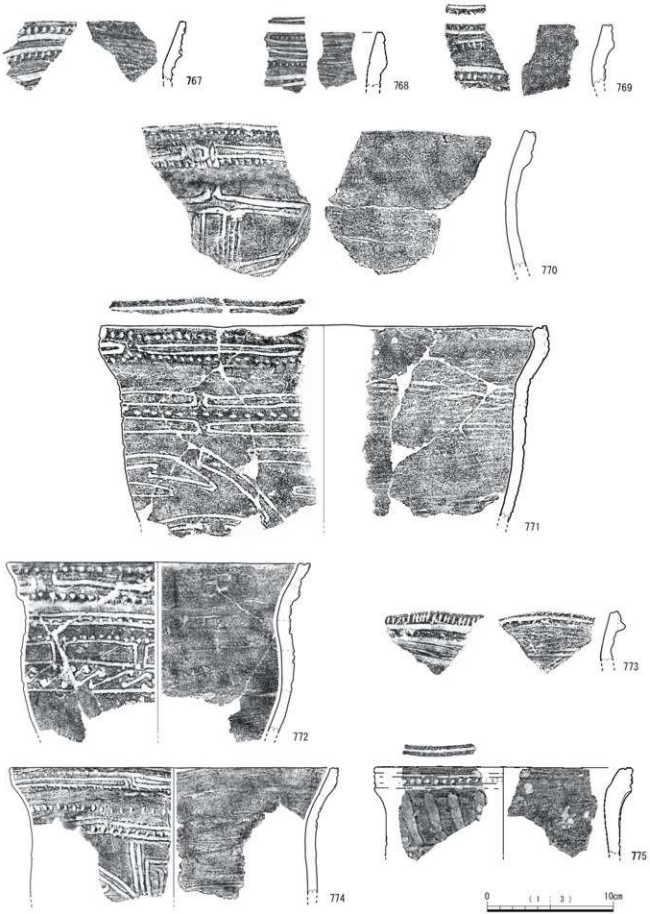
745～747は口縁部文様帯の上部・下部に篦先による粗い刺突を連続させる特徴は741～748に類似するが，口縁部外面に明瞭な肥厚帯を形成するものである。746は口縁部外面に「S」字上の文様を連続させるもので，このモチーフは本遺跡のⅧ類に多くみられるものの一つである。747は口縁端部を尖らせ，強く内湾させる。口縁部



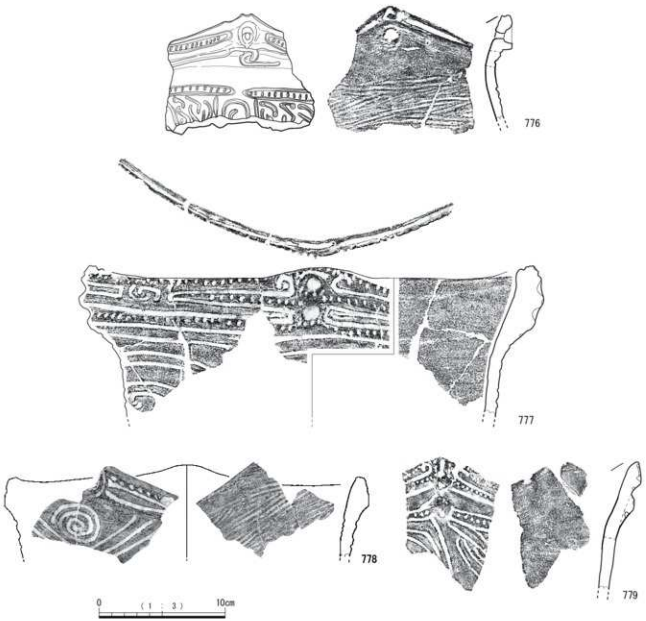
第２－32図　Ⅷa類土器（4）



第２－33図　Ⅷa類土器（5）



第２－34図　Ⅷa類土器（6）

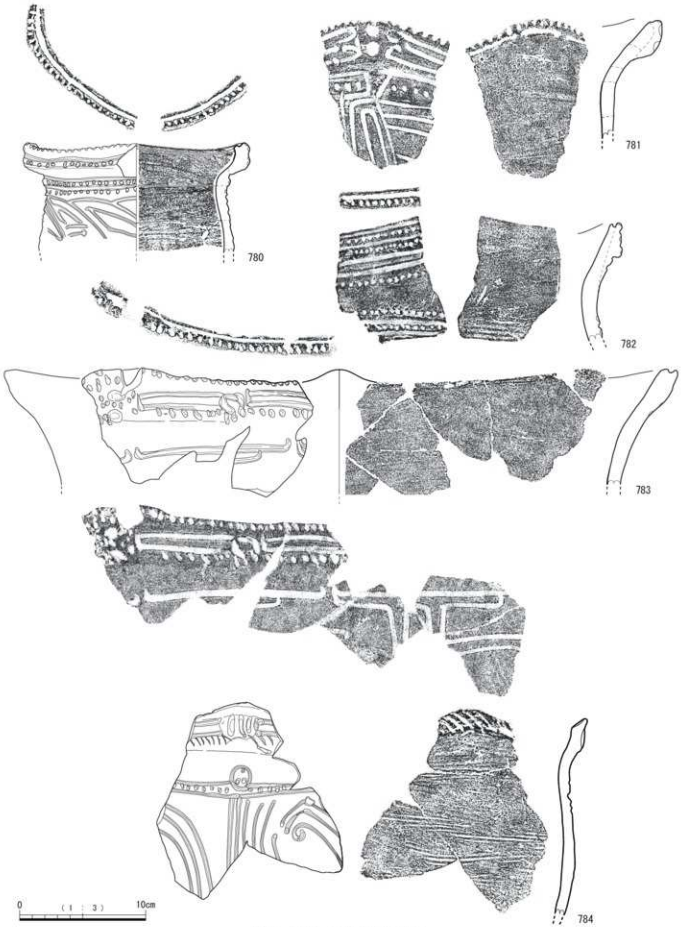


第２－35図　Ⅷa類土器（７）

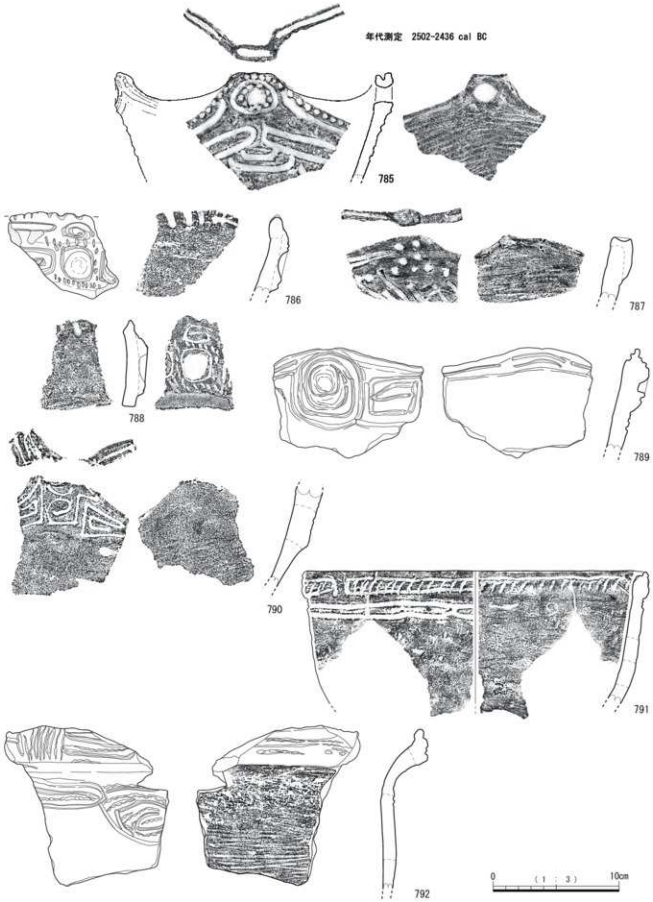
肥厚帯は外傾する。頸部が大きくくびれ，胴部が張り出す器形となると推測される。

750～752は細い平行沈線間に施先による刺突を等間隔に施すもので，施文具は違うがⅦb類（擬似縄文系）にも類似する文様パターンがみられる。ともに口縁部外面をわずかに肥厚させ，口唇部に平坦面をつくる。平坦面はやや内傾する。750の口唇部にはごく浅い凹線が粗く施される。751は外傾しながら開く直口のタイプである。752は波頂部を中心に左右対称の文様が描かれ，やや内傾する口唇部平坦面には，凹線を巡らせ，波頂部に縦位の沈線を４本施す。口唇部内面の胴部との境目の量は明瞭で，口縁部の形態は Ⅸ類（松山式）の範疇に入る可能性もあるが，胴部文様帯の特徴からここに含めた。

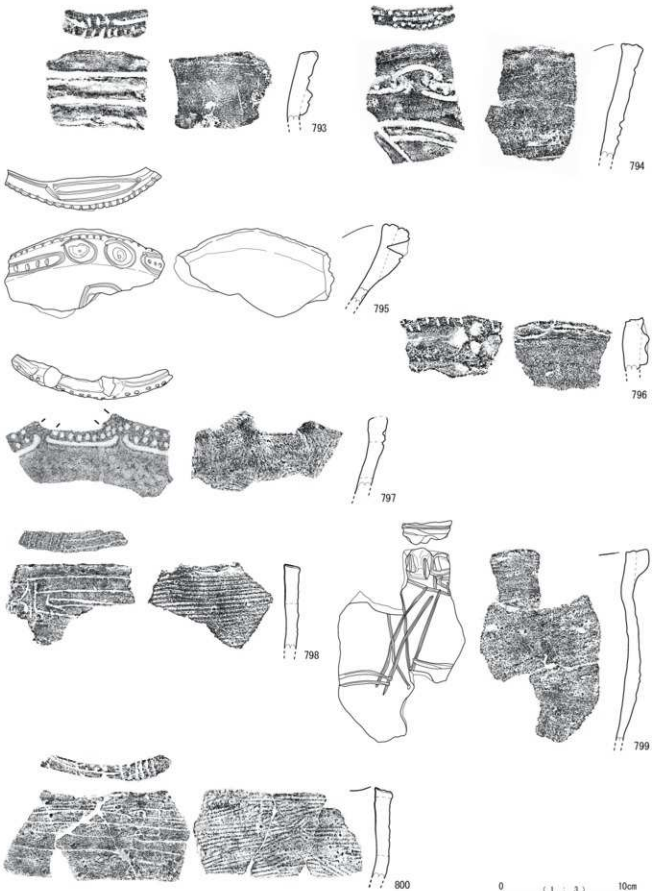
753・754は口縁端部の内面側の際にごく細い凹線を施すものである。753は外反しながら開く。口縁部上位に横位の沈線と刺突による文様帯をもち，その下に，棒状工具を使用したと考えられる太めの凹線を縦位に連続して施す。758は口唇部外面側に円形刺突文を巡らせ，やはり１段下がった位置に浅い凹線を巡らせたものである。759・760・762は丸みを帯びた口唇部に明瞭な凹線を巡らせるものである。761は凹線をもたないが無文の口縁部肥厚帯の直下に連続刺突や凹線を巡らせる文様の特徴が類似するためここに含めた。757は雑な作りであり，胴部上位に細い沈線が４条平行に描かれる。759～762は左上がりの斜位の平行沈線文を基調とする幾何学的文様が密に描かれる。762は底部まで器形の分かる資料で小



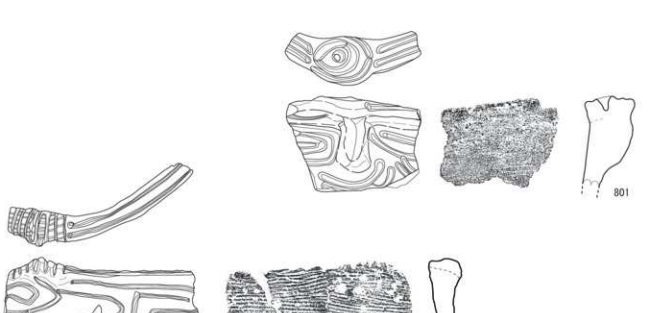
第２－36図　Ⅷa類土器（8）



第２－37図　Ⅷa類土器（9）



第２－38図　Ⅷa類土器（10）



第２－39図　Ⅷa類土器（11）

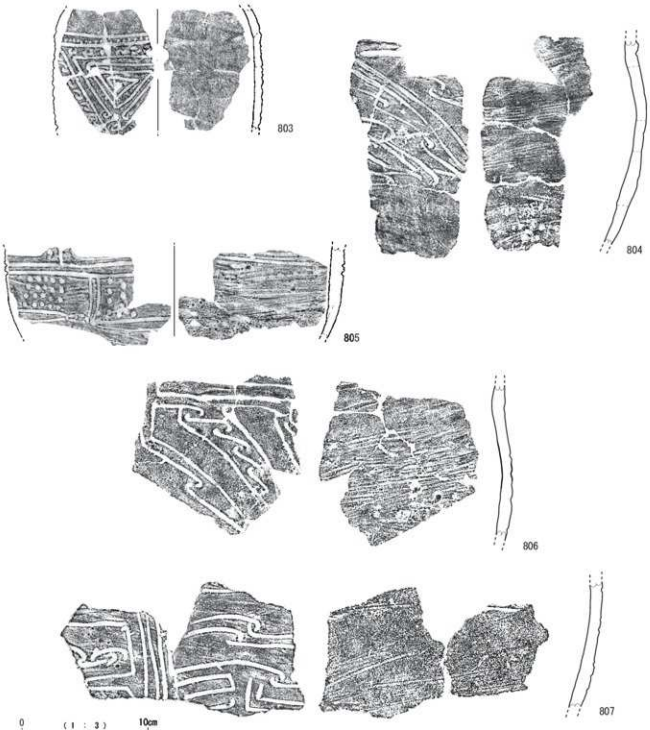
形の深鉢である。胴部上位に帯状に煤が付着する。文様帯は頸部～胴部最大径あたりに及ぶ。

763～766は口縁部外面を肥厚させて横位の沈線文を巡らせる。胴部には平行沈線文を主体とした文様帯が下位に及んで描かれる。763は口縁部肥厚帯に平行な入組文を粗く描き，764・765は波頂部の直下に刺突と凹線による円形のモチーフを描く。764は波頂部裏側にも，２本の沈線を施す。これらは口唇部をあまり肥厚させず，凹線を巡らせる。766は口縁部外面上位に沈線を描き，口唇部の全周ではなく一部に凹線を施す。

767～779は口縁部外面肥厚帯に沈線や円形刺突文・貝殻や篦状工具による連続刺突文を組み合わせた文様帯を形成するものである。767～775は平坦口縁で776・777は口唇部凹線がごく細い沈線で，778・779は凹線をもたない。767・768・771・772・774・777・779の口縁部肥厚帯の文様構成には，上下を連続刺突文を巡らせて中位に沈線を描く特徴が共通している。胴部の文様も平行沈線や連点文を主体とするものが多い。口縁部肥厚帯のすぐ下やくびれの部分に平行沈線を巡らせるものが多い。772・776にみられるような「Ｓ」字状のモチーフは本遺跡から出土したⅧ類に多くみられるものの一つである。775は指頭で描いた縦位の凹線を描き，778は渦巻文を描く。胴部の文様は３本単位の平行沈線で描かれている可能性がある。波状口縁の776～779の波頂部直下には孔・円形刺突・渦巻き状のモチーフなどが描かれる。

780～784は口縁部・胴部の文様がⅧb類の特徴をもつもののなかで口唇部がやや肥厚し，上面からみると凹線と連点文や貝殻腹縁刺突文を組み合わせて持つものである。外面側に連点・連続刺突を施し，内面側に凹線を巡らせる。波状口縁である。口唇部にはⅨ類とも類似する特徴の文様を描くが，口縁部肥厚帯・文様の特徴からⅧb類に該当すると判断した。口縁部肥厚帯と胴部との境目のくびれた部分には平行沈線文や連点文を描き，その下に平行沈線による文様を描く。残存部が少なく，全容は不明だが，781・784の胴部の平行沈線文は３条単位である可能性がある。ともに金色の雲母を特に多く含み，外面は丁寧なナデ調整で滑らかな仕上げである。

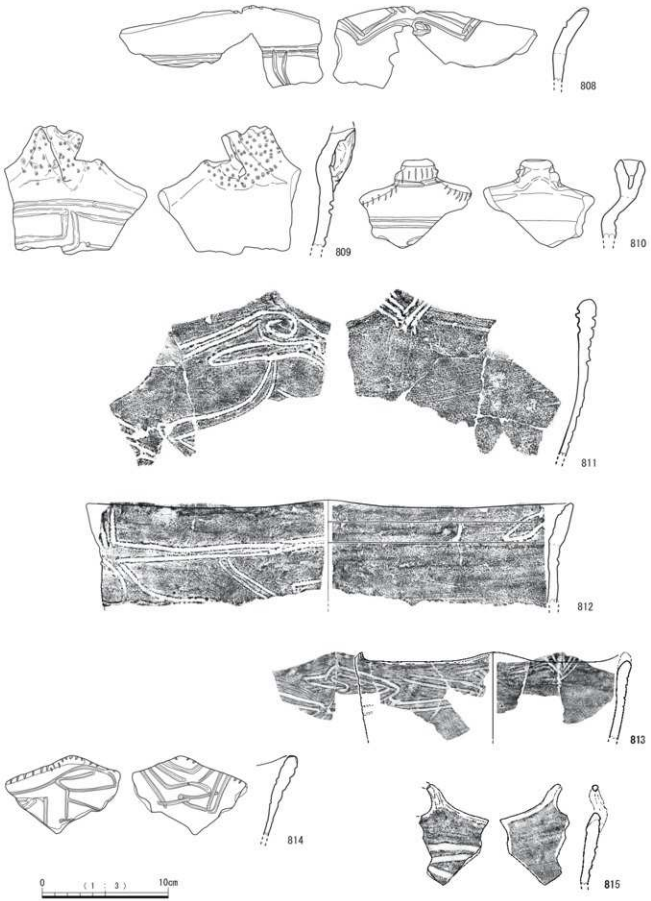
785～790は波頂部を含む破片である。785～787はやや内湾気味の口縁部で，口縁部肥厚帯と胴部との境目の段が破い。785は，波頂部外面に孔を有し，786・788・789には大きな円形の刺突や同心円状のモチーフを描く。785の外面に付着した煤を年代測定した結果（報告No.６）^{14}C 年代が3962±25yrBP１σ，２σ暦年代範囲が2502-2436calBC（48.2％）である。786と788は文様が似るが，胎土の混和材の量や種類，色調に違いが見られ，別個体の可能性もある。787は波頂部に小さな連点を施す。790は口縁部外面と口唇部を平坦に形成する。口縁部肥厚帯と胴部との境目の稜は明瞭である。口縁部の文様は波頂



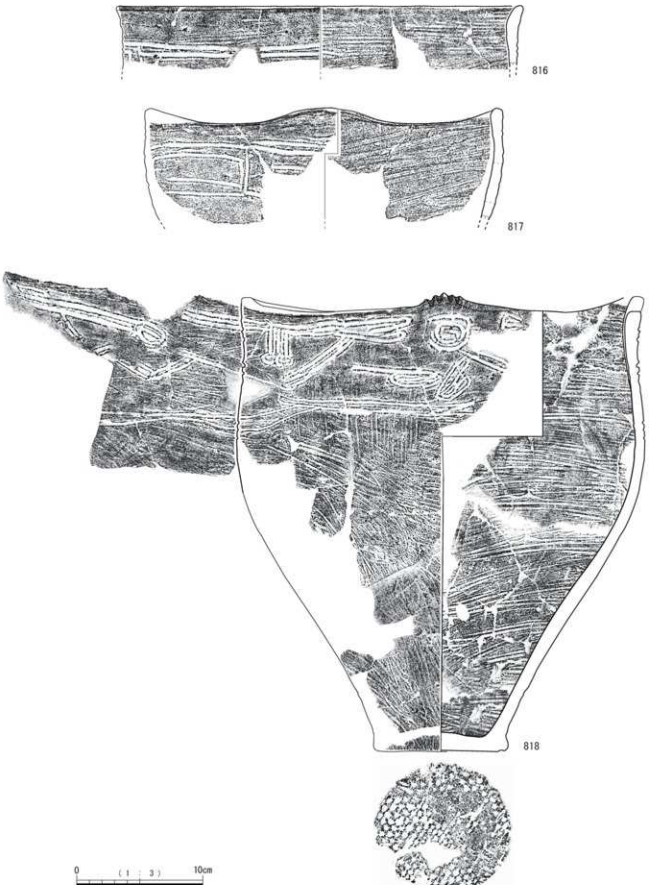
第２－40図　Ⅷa類土器（胴部）

部を中心に左右対称に描かれており，文様のパターンとしてはⅥ類の範疇である可能性もあるが，ここに含めた。791・792は口縁部内面に貝殻腹縁刺突による文様を施す。ともに口縁部肥厚帯の直下に横位の文様が描かれ，その下は無文である。形態としてはⅨ類にも類似するが，平行沈線を主体とする胴部の文様の特徴からここに含めた。

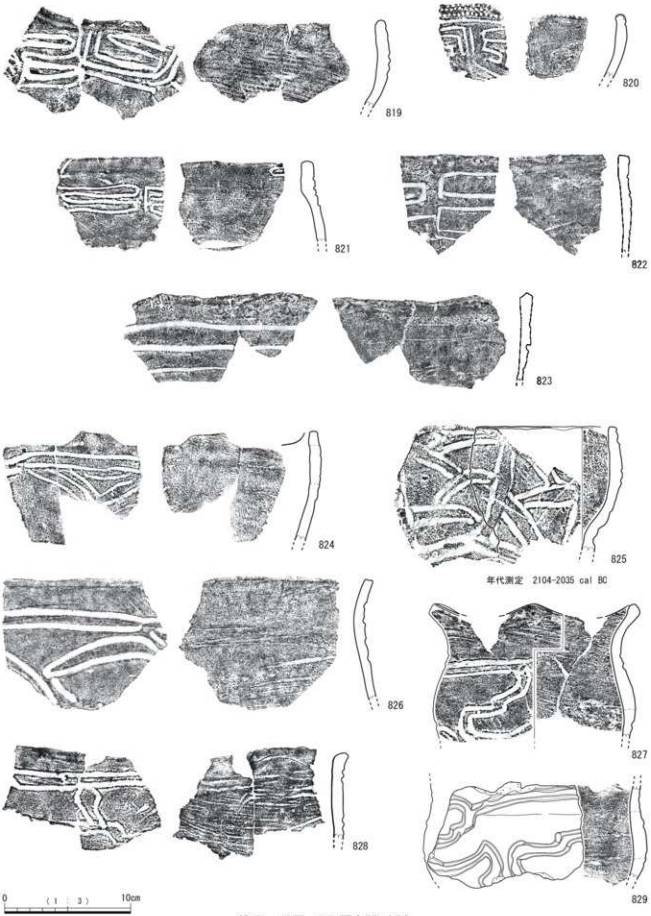
793～802は口唇部が上面を向き，平坦に形成される。796のように口唇部が粗く面取りされるものもあるが，沈線・刺突を組み合わせた文様を施す傾向がみられる。797は波頂部に突起を有すると推測される。798と800は矩形の文様を横位に展開させ，800は文様を描いた後を強くナデで仕上げているため文様が一部判然としない。801，802は口唇部を幅広く肥厚させる。ともにごく緩い波状口縁で，波頂部を外側に張り出させて縦位の沈線文



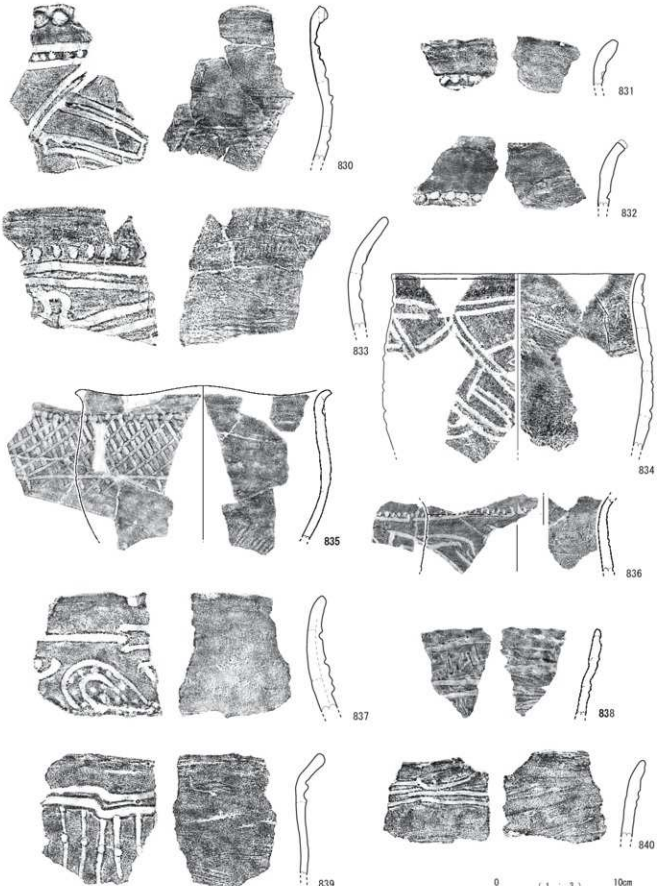
第２－41図　Ⅷb類土器（１）



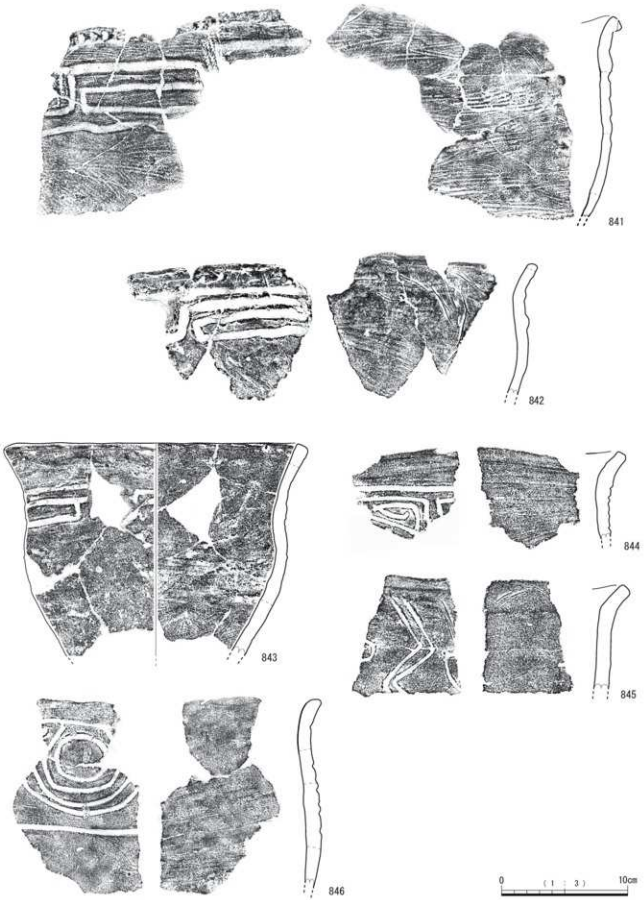
第２－42図　Ⅷb類土器（2）



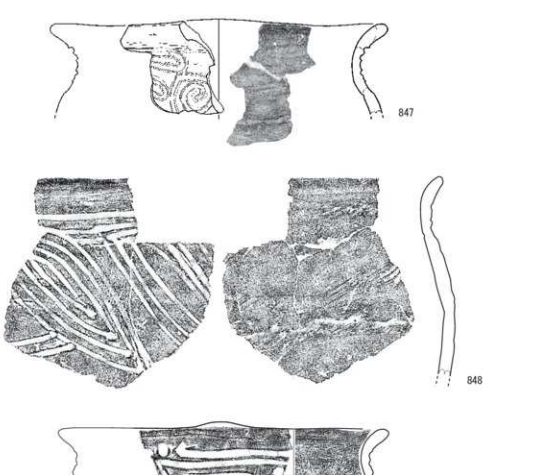
第２－43図 Ⅷb類土器（3）



第２－44図　Ⅷb類土器（4）



第２－45図　Ⅷb類土器（5）



第２－46図　Ⅷb類土器（６）

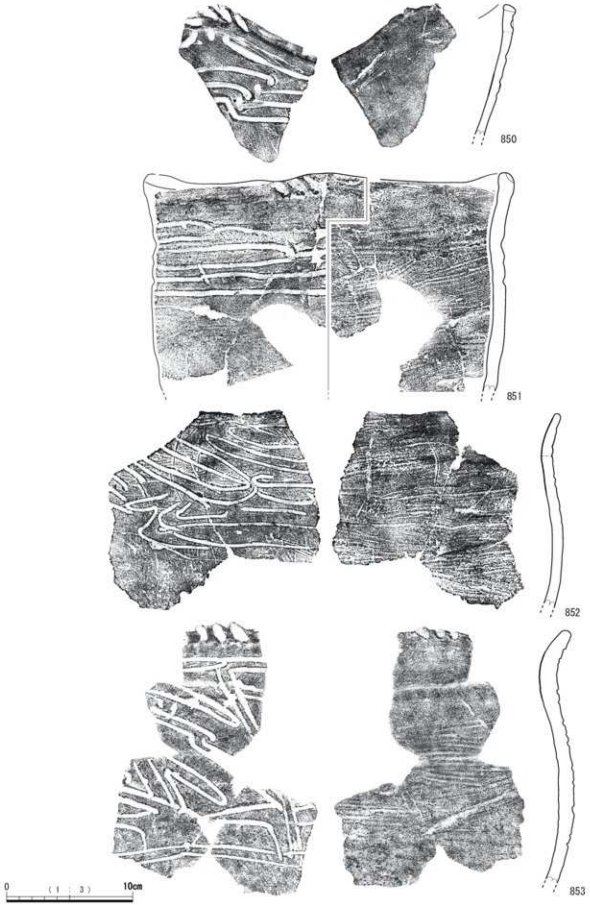
や渦巻文を施す。胴部上位に横位に曲線的な文様を描くと推測され，一部に矩形のモチーフが確認できる。

803～807は，細い沈線による文様が胴部下位に及び，密に描かれることからⅧa類土器の文様の特徴をもつと判断した胴部片である。「Ｓ」字状の入組文や刺突文が描かれるものが多い。807は下胴部片でそのほかは上胴部片である。

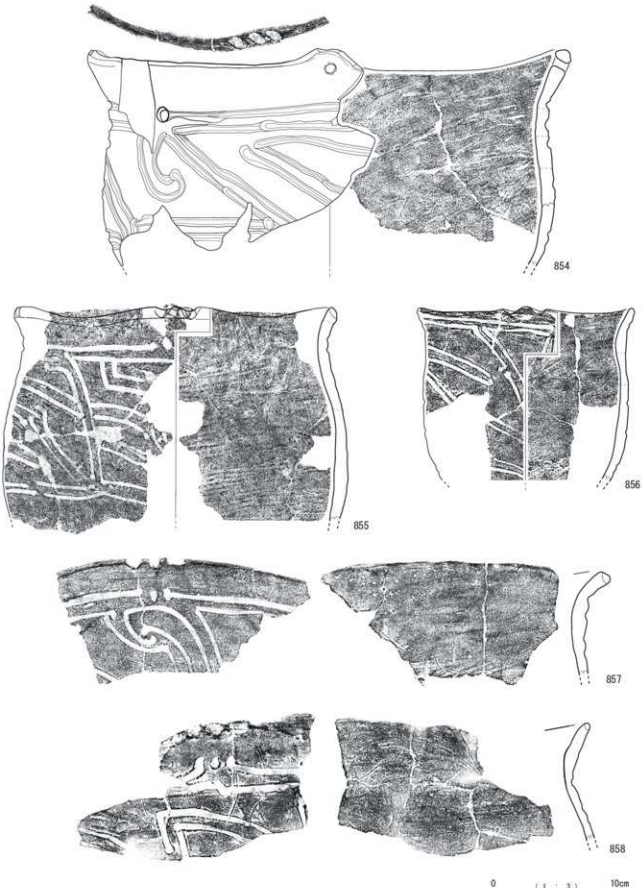
Ⅷb類（第２-41～53図　808～878）

口縁部の形態は直口，内湾，外反と様々であることを先述したが，外反するものの比率が特に高い。頸部でくびれ，胴部がやや張り出し，丸みを帯びる傾向も著しい。波状口縁と平担口縁とがある。波頂部内面に文様を描くものや，波頂部に数個の刻目を施すものが多く出土している。口縁端部を丸くおさめるものが多く，外面は，口縁部直下を無文とし，頸部あたりに１条ないし２条の横位の沈線を巡らせて区画した直下を胴部文様帯とするパターンのものが多く出土する。胴部の文様のバリエーションは多く，平行沈線文を主体とする。南薩地域の同じ時期の遺跡で出土するような，長靴文や矩形の文様パターンを横位に展開させるものも一定数出土するが，胴部に斜位の大胆な平行沈線を基調とした文様を描き，線の連結部分を鉤手状に入り組ませるもの（Ⅷa類とも文様パターンが似る。ただし口縁部の形態的な特徴はⅧb類である。先述の中原遺跡Ⅳ-c類に該当する一群）が特に多く出土する。また，平行沈線が曖昧に描かれた，規則性の弱い崩れた文様パターンのものも確認できる。

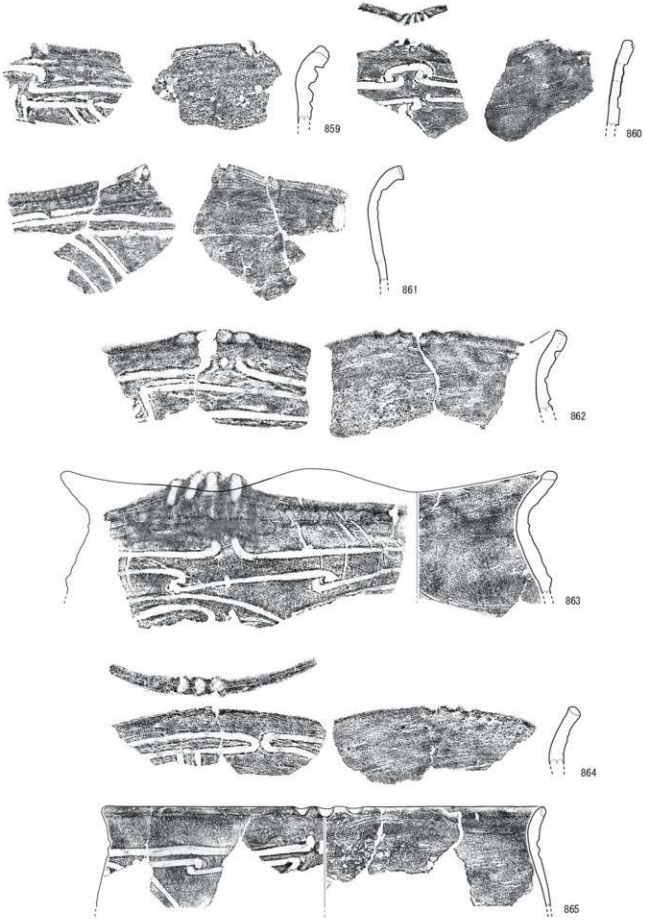
808～818は薄手で硬質な一群で，胎土の色調や混和材の特徴から指宿地方をはじめとした他の地域で製作されたものと考えられる。総じてシャープな細幅の平行沈線によって文様が描かれている。808・811～814・817の口縁は，端部にむかって器壁に厚みをもたせて丸くおさめ



第２－47図　Ⅷb類土器（7）

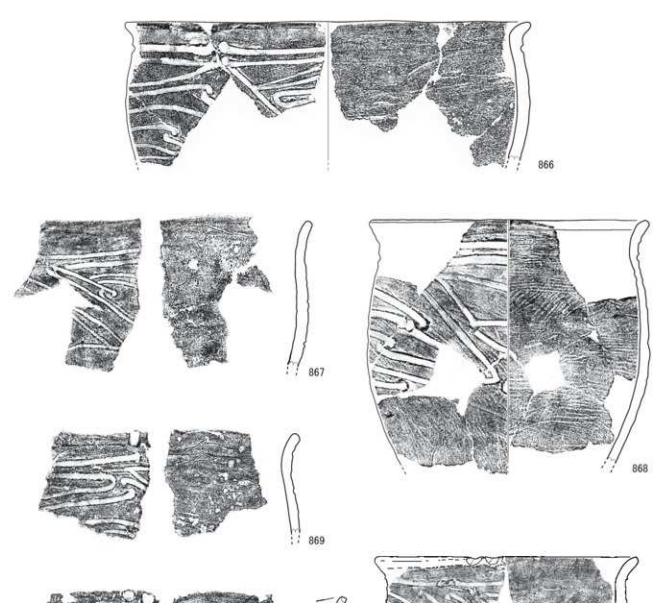


第２－48図　Ⅷb類土器（８）



第２－49図　Ⅷb類土器（9）

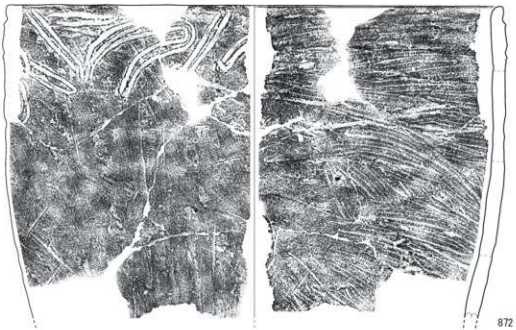
0　（1　3）　10cm



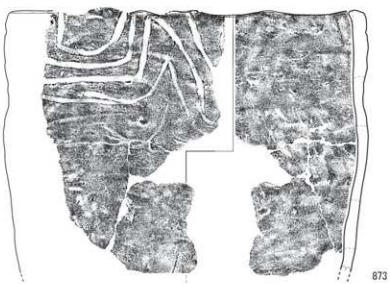
第２－50図　Ⅷb類土器（10）

る。波状口縁で，波頂部裏面にも文様を描く。809・810・815は波頂部に突起を有し孔を施す。809・812は色調が桃色で，指宿地方からの搬入の可能性もある。818は完形に復元できた。口唇部は平坦に形成される。波頂部は４か所均等につくられ，波頂部直下に渦巻き文を描く。胴部は底部にむかって急な角度ですぼまるため，丸みを帯びたプロポーションとなる。平底で網代痕が付く。渦巻文同士のほぼ中間に２本１組の文様を垂下させる。810にのみ微量な金色の雲母が混じり，そのほかは角閃石が多く含まれる特徴的な胎土である。

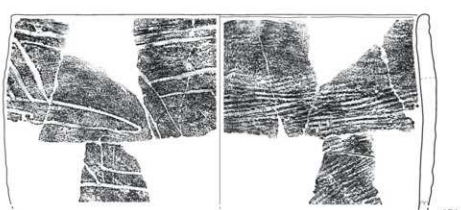
819～822は矩形の文様を横位に展開させるもので，819・820は丸みを帯びた浅い鉢状の器形となると推測される。821は口縁部がすぼまる。820は丸い口縁端部に小さな連点を密に施す。823はやや粗いつくりで，ごく緩い波状口縁を呈する。口縁端部にむかって器壁に厚みをもたせる。口唇部は粗く面取りされる。824は平坦口縁



872



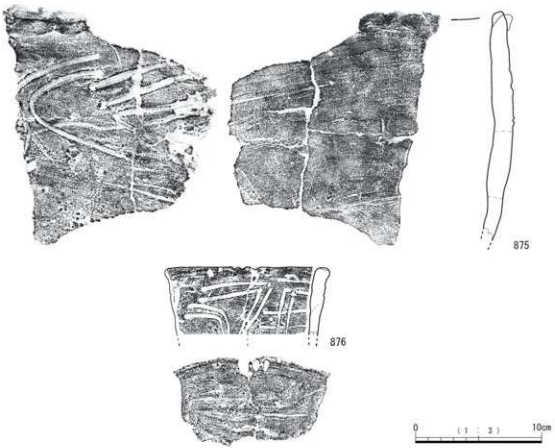
873



874

0 (1:3) 10cm

第２－51図　Ⅷb類土器（11）

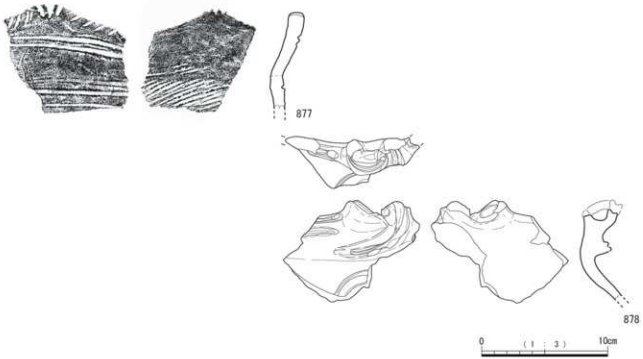


第２－52図　Ⅷb類土器（12）

の口唇部に小さな丘状の突起を有し，逆三角形状のモチーフが３条の平行沈線により描かれる。826・828は口縁部を短く外反させ，頸部外面に二重の沈線を巡らせその下にやや崩れた平行沈線文を描く。825・827は小形品である。825は口がすぼまり丸みを帯びた器台状の器形で，外面には煤が多量に付着する。祭祀などの特殊な用途に使用された可能性もある。外面に付着した煤を年代測定した結果（報告№３）^{14}C 年代が3725±20yrBP１σ，２σ暦年代範囲が2104-2035calBC（49.40%）である。827・829は同一個体である。波頂部外面に小さな円形の突起を有する。文様は胴部下位に及ぶ。826～829は胴部文様帯の幅は広いが密度は低い。

830～840は文様の特徴にⅥ類やⅦ類の要素を併せもつ。分類に迷うものであったが，頸部に沈線を巡らせてその下に文様帯をもつことや，胴部の文様が平行沈線文を主体とすることをⅦ類の範疇であると判断し，ここに含めたものである。830～836は頸部のくびれ部分の外面に連点文・あるいは連続刺突文を巡らせるものである。830は口縁部外面の最上位に突帯を巡らせて，貝殻背面による大きな刺突を連続して施す。頸部に巡らせた平行沈線間を巻貝によって等間隔に刺突する。837の胴部にも同様の文様パターンがみられる。これらの特徴はⅦb類に多くみられ，Ⅷa類にも少数出土する。また，833・837は金色の雲母とともに白色粒子を特に多く含み，胎土の色調も明るいため搬入品の可能性も考えられる。831・832・835は頸部に凹線を巡らせ，その上に連続刺突を施す。Ⅶa類に多くみられる文様パターンである。835は緩い波状口縁で口縁端部が短く強く外反する。胴部上半に斜格子状の文様を帯状に描く。833・834・836は頸部に巡らせた端・平行沈線文の直上に貝殻刺突文を等間隔に施す。Ⅵ類にも多くみられた文様パターンであるが，貝殻腹縁を明瞭に刺突しⅥ類よりも小さな刺突である。胴部の文様は平行沈線によって描かれる。838・840は直線的に立ち上がる器形でかなり粗いつくりである。わずかに外反する頸部外面に平行沈線をもつことからここに含めた。

841～844は長靴文や，矩形の文様を横位に展開させるものである。頸部でわずかにくびれ，口縁部は外反する。841～843は文様帯が胴部上位に集約される。841は830と同様に口縁部に突帯をもつ。縦位の平行沈線間に貝殻腹縁刺突を充填させる。Ⅶb類の範疇である可能性もあるが胴部の文様の特徴からここに含めた。また，この文様パターンのものはやや線が太い傾向がみられるため，Ⅵ類との関連性も窺える。845には平行沈線による垂下文



第２－53図　Ⅷb類土器（13）

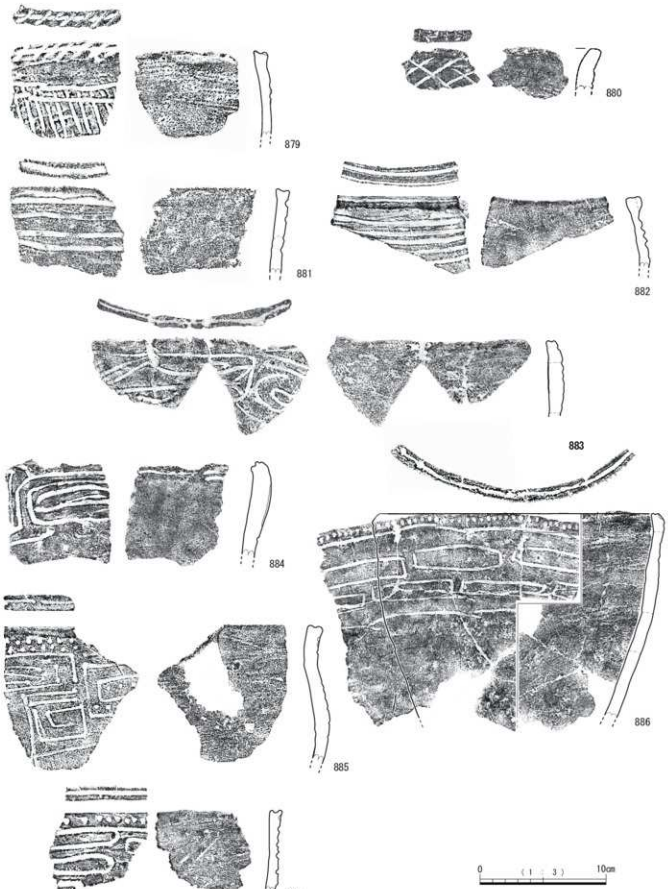
を描く。846・847は同心円状や渦巻き状の円形のモチーフを描く。なお，847～849は口縁部が短く外反し，頸部の屈曲度が大きく胴部が大きく張り出す丸みを帯びた器形である。849は薄手で硬質である。線の始点と終点を明瞭に刺突し，太めの沈線を深く施す。器面をしっかりとナデで調整して仕上げた丁寧なつくりである。なお，内面の調整には工具が使用される。SS27から出土した，色調が黒色を呈し搬入品の可能性をもつ413と形態・文様・調整の特徴が似る。褐色の胎土で金色の雲母が混じる。

850は大きく外傾しながら直線的に開く器形で，鉢状の形態となる可能性もある。文様・胎土の混和材・調整の特徴は413と似るが色調は褐色である。内面には篦痕が多く残る。

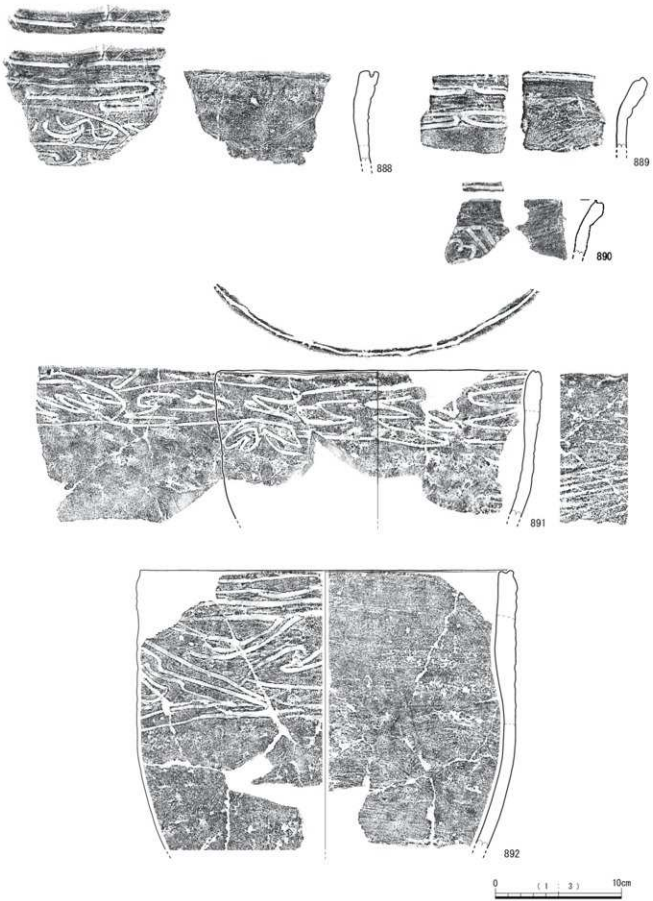
851は口縁部上位を無文とし，頸部のくびれ部分に明瞭な単・平行沈線を巡らせ，それより下位に文様を描くものである。なかでも残存部分の多いものに着目すると，胴部が丸く張り出し，底部にむかって急な角度ですぼまる傾向がみられる。また，文様帯の幅も広く胴部下位に及ぶものが多い。平坦口縁と波状口縁とがあり，波頂部や口唇部に２～４条単位の刻目を等間隔に有するものが多い。残存率の高い資料から推測すると，口縁部の４か所程度に等間隔に施すものと推測される。851は多重の平行沈線を横位に描くもので，文様帯は胴部上位に集約される。沈線の所々を弧状に継ぐ。852は薄手で硬質である。内外面の調整には条痕を残す。やや崩れた平行沈線文である。所々を弧状に継ぐ特徴は851と似る。853～856は胴部に斜位の大胆な平行沈線文を描くタイプで，本遺跡からの出土点数が最も多い一群である。細い沈線で幾何学文が描かれるものも多く出土し，Ⅷa類にも共通する特徴である。大きさは様々な規格がある。854には２か所の孔が確認できる。波頂部の孔は内外両側から，胴部の孔は外面側から施される。863は橙色の胎土で，白色粒と金雲母を特に多く含み，外面が滑らかな手触りである。搬入品の可能性も考えられる。

872～876は口縁部と胴部文様帯を区画する横位の沈線がやや不明瞭で，胴部上位に粗い平行沈線文を描く。872～874は器壁は急な角度で立ち上がり，口縁部の形態は内湾気味である。口縁部直下～胴部上位に文様帯をもつ。器面の調整が粗い。873は口唇部の内側に粘土を貼り付け肥厚させる。875・876は口縁部が外反するがその度合いは小さい。876は平坦口縁の一部をわずかに隆起させ，刻目を施す。876は小型である。875は，口唇部の一部がⅧa類のように突帯状に形成されるが，突帯を器面になじませて一体化させており，全周に巡らせるものではない。DKS16から出土した514とは胎土，文様が類似し同一個体の可能性もある。

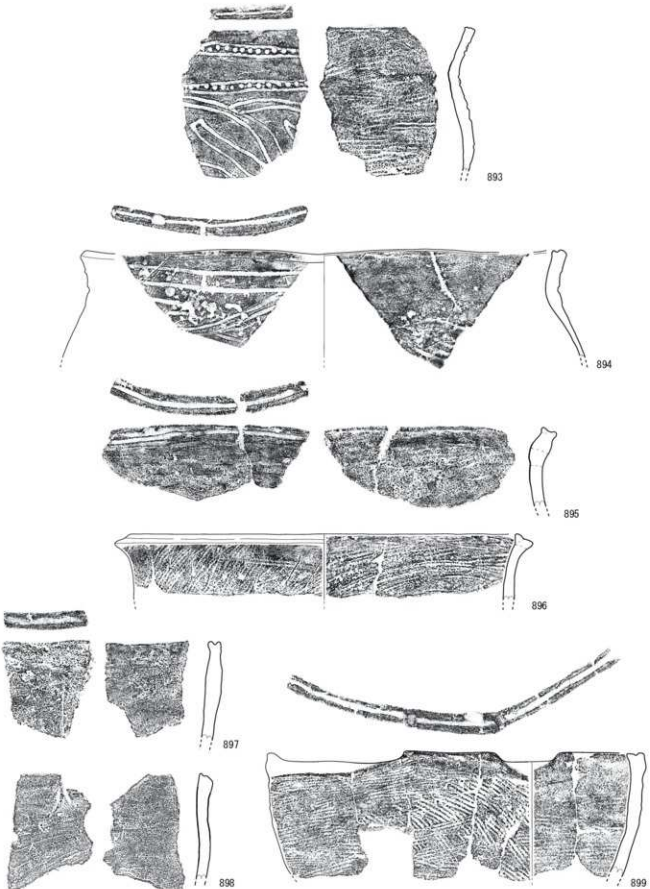
877，878は，ともに波状口縁で，頸部が大きく外反し，口縁部は明瞭に内湾する。877は波頂部に刻みを入れる特徴からここに含めた。口唇部に浅い刻目を巡らせることや，頸部のみではなく口縁部直下にも平行沈線文を巡らせることから，搬入品や時期差の可能性も否定できな



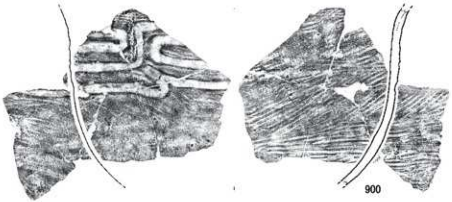
第２－54図　Ⅷc類土器（１）

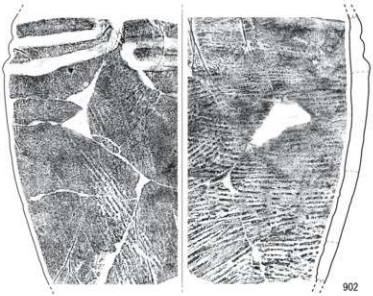


第２－55図　Ⅷc類土器（２）



第２－56図　Ⅷc類土器（3）





年代測定　2697-2567 cal BC

年代測定　2498-2398 cal BC

年代測定　2671-2554 cal BC

第２－57図　Ⅷb, c類土器（胴部）（１）

0　（1：3）　10cm